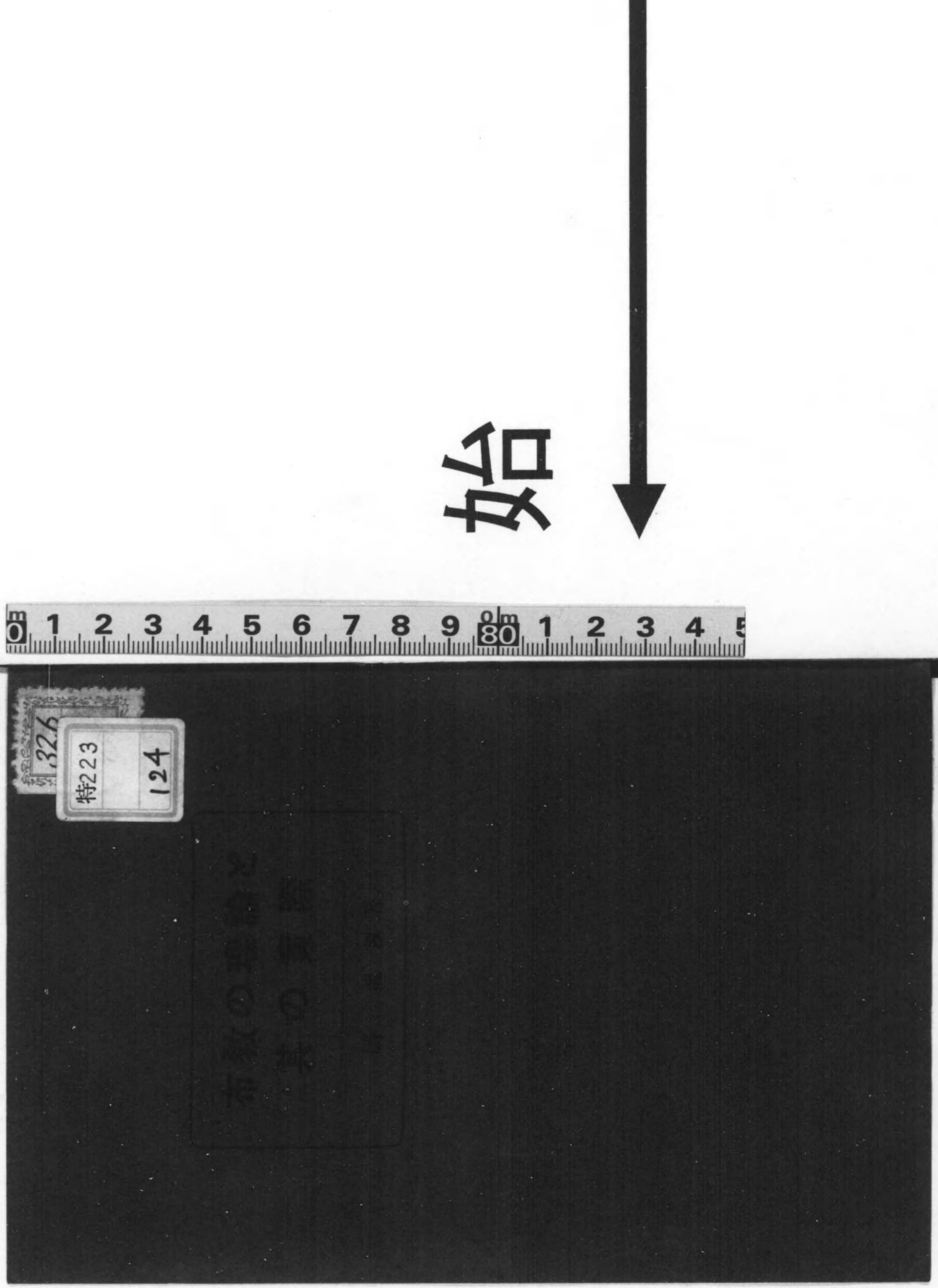
投函
特223
124

326
特
124

布教の理論と其の實際

調　龍叡著

特223
124

布教の理論と其の實際

大谷大学図書

序

説聽の方軌に關しては由來その著少からずと雖も、多くは談義講説の話術か、さもなくば法譬緣の合法敎材の資料に關するものである。併し苟且にも自信敎人信を旨とす大悲傳化の布敎に於ては單なる舌の上の唱導でなく、身の上の化導に由りて初めて傳化の實が擧げらるゝのである。卽ち能所説聽の心の溝に彌陀大悲の法水が疏通交流して身心悅豫の歡喜地に遊樂しつゝ人生の始中終を全ふせしむる布敎の完成には説者は身口意の三業を通じて説き聽者に眼耳心を開いて聽くを要するのである。是れ敎人信の聖業が難中轉更難の類ある所以である。

頓者、敎界の先達、調龍叡氏「布敎の理論と實際」を著はし稿本を予に示さる。一讀するに丁寧親切、善く説者の用意と心術を述べ説法の方軌、微より細に入り

傳道者として必ず一讀すべき須要の書であることを疑はない、よりて此に上梓せらるゝにあたり一言を呈して布教に從事せらるゝ諸士に推奬する。

昭和四年十二月三日

布教研究所に於て
内田晄融

自序

○

思へば、既に三年丁度滿二ヶ年前卽ち昭和二年十一月であつた、此の小著を腹稿し一氣可成に筆を執つて其の大部分を書いたが、元より自分の體驗のまゝを書くのであるが故に別段心にかゝることもなくすら〳〵こ書き上げて仕舞ふ積で「聲」に近刊豫告をすら發表した位であつた。

然るに其の最後に至つて、私には非常な驚きと懺悔とが湧いて來たのであつたそれは、この小著が聊かでも後進の諸氏の爲にするものであつたとするならば、單なる過去の體驗の上の成敗善惡のみでなくて、僅かでも將來の布教界に對する洞察と抱負を以て過去に於ける自己の體驗を批判するの必要がある。この批判こそ、後進の諸氏に忠實なる所以であり、又自己の正直な懺悔であらねばならぬと云ふことであつたのである。これが私をして專心この小著に對して考慮せしめ思

索せしめ而うして其の後今日迄三年間再び實際の壇上に過去三十年の體驗を更に特別に試ましめたのであつた。茲に於て過去の成敗利鈍は益々明かに切實に、その差別黑白を示して吳れた。

故にこゝに、やう〳〵に成つた此の小著は實に私の過去に於ける成敗利鈍の懺悔であり告白であるのである。たしかに前車の覆へるは後車の誡であることを勇敢に申述べる次第である。

○

然しながら何れにしても、體驗は體驗である、曾て三年前の豫告に述べたことは決して僞ではない、たしかに眞實である。即ち昭和二年十一月に近刊豫告した。布敎研究所に研究を重ねて京都の淹留實に二ヶ月私に取つては大學林の學窓を離れて以來の記錄でありました、其の產物が是であります、蓋し私の布敎三十年間の體驗から獲たものでありまして、本春以來、備後敎區の布敎研究會を筆頭に各地の研究會に發表しました處のものを整理したものであります、その實

際編には最近の說敎の筆記を擧げて置きます、一派の生命たる布敎界の上に何等かの貢獻が出來ましたら、此の上もなき仕合こと思ふて居ります、之を先輩並に後進の諸賢士に奉呈して其の叱正を乞ふ爲めに經濟上の瘠痩を深めながらも尙且つさゝやかな貧囊を叩いて之を梓に上す事に致しました。

やはり此の通りの考へは今日こ雖もさらに變りはないのである、故に私の過去の體驗こ又聊かの所見こが、布敎界の爲に表裏の何れにでも多少の貢物こなつたならば、著者は望外の光榮こ存ずるのである。

○

時は方に思想こ經濟この上に異常な衝動を與へて居る、布敎家の方に躍躍一番大いに盡さねばならぬ時である、此の時に當つて此の小著を公にすることも併せて著者の頗る光榮こする處であります。

時爾昭和四年十一月二十日本願寺布敎研究所評議員會に出席し聲社に入りその翌二十一日豫告付金解禁の大藏省令の發布を見て感慨の胸を抑へつゝ此の小序を綴る。

（京都深草の聲社に於て　龍　叡）

布教の理論と其の實際　目次

〔緒　論〕

布教學としての體系……一
學問的說教と實際的說教……二
普通の講演と宗教上の講演……四
說　教　と　講　演……四
立つた說教と坐つた說教……八
信仰的說教の本質……八

〔本　論〕

——（說教講演の成立）——

第一、人……一〇
一、信仰的人格の發露……一一
（1）熱　と　力

(2) 布教使命の自覺
(3) 教位に立つた時
(イ) 善知識たりこの自覺
(ロ) 御聖教中心の說教
(4) 機位に坐つた時
(イ) 御同朋御同行主義
(ロ) 教位機位の融合調和
二、努力こ練習……一八
(1) 說教講演の組織
その組織法
腹稿の作製
主意の一貫
正則的の組織
變則的の組織
組織に就ての注意
(イ) 序辯
(ロ) 正宗
(ハ) 譬喩因緣

(ニ) 流通
(ホ) 組織法餘論
(2) 音聲の練磨
故造の聲
自然の聲
練習の方法
發音の注意
發音こ攝生
自然を模倣せよ
辯舌の修養
修養上の注意
古來よりの教訓
近代大家の實例
(3) 結論
三、布教上の注意……四
(1) 平素の注意
(2) 布教者の態度
(3) 實際時の氣分

第二、法……四九
一、宗乘……五〇
二、余乘……五〇
三、科學……五一
四、布教上に於ける學問の注意……五一
五、結論……五一
第三、機……五二
一、所對の機……五三
二、大衆的聽衆の三大注意……五三
三、大衆的聽衆の群集心理……五四
四、聽衆の特異性についての考慮……五五
(1) 立てる聽衆と坐せる聽衆
(2) 男性と女性
(3) 老人と青年
(4) 職業別
(5) 限定せられたる聽衆
(6) 信者階級
(7) 有識階級

(8) 無識階級
(9) 批評者及び誹謗者
(10) 富樓那の話
五、結論……六一
第四、實例(實際上の事に就いて)……六二
一、音聲の使用法……六二
二、因緣を話すに就ての注意……六四
三、優婆塞戒經の十六則……六四
四、說教の中心卽ち熱を何處に置くかといふ問題……六七
五、引例の扱ひ方……六八
六、說教の妙所……六八
七、實例……七〇

〔結論〕

一、天才的布教家とその末路……七九
二、實談と實談……八〇
(1) 實らん哉、說かん哉、味はん哉の說教

(2) 實談と實談
(3) 布教使の心理
(4) 自慢心と嫉妬心
(5) 自讃毀他、我慢勝他の人は向上せず
(6) 無感銘の說教
(7) 猛省一番を要す
(8) 此の心を持つて講壇に立て
(9) 昔の說教と今の說教
(10) 生命ある說教
(11) 青木勝道君の生きた說教

〔餘論〕

醫學博士諸岡存氏の講談論……八九
新と舊……九〇
珍らしい話……九一
辯舌と使用語についての注意……九二
一歩主義……九三

宗教的術語の使用問題……九五
宗學の說教化……九八
布教方針の一面觀……九九
社會問題を如何に取扱ふべきか……一〇一
社會事業と傳道……一〇三
新舊思想過渡時代の布教法……一〇四
布教の將來……一〇六
宗政家と宗學者と布教家……一〇八
寺院布教に就て……一〇九

布教の理論と其の實際

調龍叡述

緒論

布教學としての體系

若し「布教の理論」と云ふ立場に立つて、之を叙述せんとするならば、勢ひ布教學としての體系を組織せねばならぬ。若し布教學として科學の一分科を開くならば、そこには

布教の機關
布教行政
布教政策
布教の形式

布教の内容
布教術
雄辯法
修辭法
傳導心理
群集心理

と云ふ樣な事項をも研究せねばならぬと思ふのである。

既に修辭法の如きは、方に一科の學問として成立し、今や雄辯法も亦、將に雄辯學として一科を成さんとして居る、故に布教に於ても、布教學として科學の面目を發揮する日も蓋し遠き事ではなからうと信ずるのである。

學問的說教と實際的說教

然れども、茲に布教が科學として體系づけられたとしたならば、それは既に一種の學問としての化石となりはすまいか。

出離生死の行學としての宗乘は兎も角、單なる學問としての宗乘であるならば、如何に辯護しても、それは矢張り硬化したる骸骨として、社會の一隅に殘されて行くが如く、布教學も亦同じき運命を繰返さねばならぬと思はるゝのである。

布教、言ひ換ゆれば說教は、何處までも活躍そのものであつて、更に硬化すべき性質のものでもなく、又硬化する筈もないのである。若しそれ、いさゝかでも硬化の氣分が在つたとすれば、それは又、「學の說教」であり、既に「說教の死」であるのである。

抑も學問は、「如何に說明せんかとの努力」であるが故に、若し學問的說教なれば、やはり說明に墮して仕舞ふのである。說教は「如何にして信ぜしめんかとの精進」であるが故に、常に生ける活躍であつて、言々語々、皆信念の迸りであらねばならぬのである。

然るに斯の如く聊かながら、說教の組織や方法等を論述すれば、そこにはそれ相當の體系が備はつて來るから、やはり說教學又は布教學として立つの嫌ひがないでもないが、然しそこには注意深く之を玩味し、努めて學問としての說教に捕はるるの弊を遠けねばならぬのである。

茲に於て、書物となつて文字の上に現はれたる說教には既に生氣を失ひ、たとひ蓄音機に收め

られ、ラジオに依つて聞かされるものゝ雖も、それは第二、第三のものであつて、何うしても生けるその人の前に座し、その肉聲の説教を聽かなくては、眞實の説教を聞いたゝは言ひ得られないのである。故に同一の説教の材料でも、その説教者の人格に依つてそれ〴〵に變化され、或は蠟を嚙むが如きものゝもなり、或は山海の滋味を食するが如きものゝもなるの相違を來すも方に斯處であるのである。

普通の講演と宗教上の講演

こゝに於て、單に講演、講話、講座といふても、學術、政治、經濟等のそれと宗教上のそれとは、大なる隔たりと、又其の性質を異にして居る事を知らねばならぬ。

普通の講演は、多くの場合斷案と斷定と又結論とを持たぬもので、之に反して宗教上の講演は、必ず斷案と結論とを有してゐるのである。若しそれ、その講演が、斷案と結論とを持たなかつたならば、それは只、宗教的思想の講演であるか又は學的宗教の講演であつて、決して宗教的講演ではないのである。

説教と講演

説教といふ名詞は、釋尊時代の説法と云ふ事で、又それが説教ともいはれてあつて、印度から支那日本へと流轉される間に、教化とか、唱導とか、説法とか、談義とか、講經とか、論議とか、法談とか、講義とか、勸化とかと云はれて、それが日本で説教といふ事に云はれてきたのは、明治維新後の事であると云ふことである。

故に説教と云へば、斯の如く、既に久しき傳統と習慣とに於て、一種の「概念又は通念」を持つてゐるもので、是は全く、宗教の上にのみ云はる可き性質のもので、それは斷案と結論とに生きてゐるからである。そこで、「ではなからうかと思ひます。」とか、「であらうと思はれます。」とか、「ではないでせうか。」とかの如き言葉は、是非必要である以外には、之を用ふる事を注意せねばならぬ。然し多くの場合、「斷定語」、即ち「であるのである。」とか「あるのぢや。」「なければならぬ」と云ふ言葉が、極めて明瞭に使用され得るのである。故に、天文學の説教會、地質學の説教會、又は動物學の説教會といふが如きは、何うしても云ひ得られぬのである。

然るにこの説教より分離して演説、講演、講座、座談といふ形式が現はれて來たのは、説教の墮落と、さうして説教の獨斷的階級的なるとに反抗嫌忌した結果に外ならざることゝ思はるゝの

である。

思ふに、所謂說教なるものが、一種の型、卽ち形式のそれに捕はれ、甚だしきは全く儀式化され終つて、月並式の讀み法談となつて仕舞ひ、甚だしくその俗化したものには、歌說教等と呼ばるるものすら現はれ來たつて、そこに一の藝人として取扱はるゝ所謂お客僧御說教師が出來て來たのである。こゝまで墮落した說教に至つては、「誰か之を嫌忌せざらんや」であるのである。

而して又その一面には、宗教の本質としての、「斷案と結論」とが餘りに亂用された爲め、時代思想に目覺めたる、然も宗教を知らざる一部の人達には、之が獨斷的に、又階級的に聞き誤られ、爲に反抗の氣勢が擧がつて來たのである。この時宗教界の所謂新人と云はれる人々は、內部から之に應じて散々に說教を罵倒したのであつた。かくして說教はたゞ低級者の聞物として取扱はれ、それが寺院內に押込められて終つた感がある。故に若き宗教家といふ人々が、全く高座上の說教家たることを嫌ひ、單に講壇上の人たる事を競ふの傾きとなつて來たのも亦事實である。

思ふに說教は、多く教位に座して常に、「吾教へんかな」との態度に於て、「聖人下に被らしむる」の權威を振りかざすの場合が多い爲に、信仰なき人々には如何にもそれが常に傲慢と見られ易ゝ

のであると思ふのである。

然るに所謂講演なるものは、多く機位に降り立ちて、常に「共に喜ばん」との態度に於て御同朋御同行式であり、所謂相談の形であるため非常に親しみ易く、隨つて聽衆自身の尊嚴を傷けらるゝ傾きが少い感がある。故に若き人々には是が多く歡迎されるのであると思ふのである。

然しながら、講演講座等も、それが餘りに諸君式、兄弟式であつて、凡てが「あるまいか」「思はれる樣であります」といふ風に、全く迎合的でさうして阿諛諂佞卽ちおもねりへつらう傾きが多くなつて來たゝめ僅かの間に墮落の道に進みつゝあると思ふのである。

故に講演は、親しみ易けれども隨つて權威が少く敬虔の念に乏しく、說教は權威があり崇敬の感も深く起るけれども、反面、憍慢や階級的と誤られ易い嫌ひがあるのである。

さればこの說教講演の教位と機位との兩長所を調和する時、座すると立つとの如何を論ぜず、又形式の如何を問はず、そこに純乎たる宗教上の說話が現はれて來るのである。故に、一面には如來の御代官であるとの教位に座し、一面にはお慈悲を信受したる機位に立ちて、自己自身の敬虔な信念が發露する時、障碍も批難もあるべき筈はないのである。

されば宗教上の説教と講演とは、座したると立ちたるとの違ひであつて、その精神に至つては實に同一のものであらねばならぬのである。たゞ僅かにその形式方法を異にするのみで、強て言へば講演は門であり、説教は堂であり奥であるとの相違のみと思ふのである。

立つた説教と座つた説教

私はこの意味に於て、むしろ講演、講話、講座、座談等の新らしき名詞を捨てゝ、唯の説教と云ふ言葉のみを用ひて、之を立ちたる説教、座したる説教として見たいのである、さもあらばあれ、新興宗教の人々は、既に此の點に注意して、特に「説教」といふ名の下に、其の宗教味を極めて崇重に取扱はんとして居り、之に反して、既成宗教が「説教」と云ふ名から離れて、講話、講座等の新しき名を趁はんとしてゐるのが、殊に目立つたコントラストで、丁度若き婦人が却つて地味な衣服に自己のケバノ〳〵しさを氣高く奥深く見せんと裝ひ、中年の婦人が多く若作りして人に誤はんとするのと同樣の心理ではあるまいか、蓋しそこには生々とした元氣潑溂なものと、廢頽凋落せんとする悲哀とが、まざ〳〵と見せつけられてゐるではないか。

信仰的説教の本質

由來吾等の信仰は、常に活動して止まざる生氣に滿ち希望に輝き將來に勇進してゐるものであつて、言はゞ豐富な濃艶さを方に握らんとしてゐる二十四五の青年婦人の態度で決して廢頽萎靡の氣分は些しでもないのである。

故に豐富な權威のあるさうして敬虔に且つ愼しみ深い、生氣潑溂、勇氣鬱勃更に又穩健にして親しみのある「説教」に向ふて努力し精進したいと思ふのである。

本論

說教講演の成立——人、法、機——實例

說教講演の成立は、微細に之を論じ來れば、古來幾多の先輩が相當に研究を重ねて之を發表して居るが私も亦聊かの體驗に基いて左の三項目として之を考究してみたいと思ふのである。

一、人　說　く　人
二、法　說かるゝ法
三、機　聞く　相手

第一、人

「人」とは信仰的布教人格卽ち說き手である、されば信仰的布教人格の教養がその第一要素である。此の教養については、第一に說教がその信仰的全人格の發露であるといふ事を自覺し、その教養として努力と練磨との功を積み、而して尙ほ布教上に於ける一切の注意を怠らざる時、此處に初めて布教者としての資格が完成さるゝのである。

一、信仰的人格と發露

抑、說教とは如來の法を說く事である。大聖釋尊の經典は說教であつて、釋尊は卽ち說教者である、今是を吾淨土眞宗に於てみる時、釋尊は諸佛證誠の一人として又第十七願の咨嗟讚嘆の願に應じて彌陀の本願を說かれたのである。故にこれが我等の說教の模範である、されば「我見是利故說此言」の金言に倣ふて吾等も亦當に自己自身の信仰を發表することを說教と心得べきである。

蓮如上人が

信もなくて、人に信をとられよ〳〵と申すは、我は物をもたずして、人に物をとらすべきといふ心なり、人承引あるべからず（御一代聞書）

と誡め給ふてあるのは正しく是であると思ふのである。

故に布教の根底は信仰である。されば雄辯法や修辭學に依つてのみ修得した學術、政治、經濟等の演說講演とは全く趣きを異にしたる點が多い、元より雄辯法や修辭學を排斥するのではないが、その雄辯修辭を超越して對他的教化の自然の發露の上に一種の生命ある熱と力との雄辯が溢れ出るのである。

1、熱と力

たとひ雄辯法や修辭學に依つて修得された說敎が巧に堂內を歷し、聽衆を魅了し終つても、それは其の當時の感興のみであつて、時去れば興奮せる感激は全く消へ「あゝ上手ぢやなー」『巧だなー』だけの讃辭が殘るのみであつて、たゞ僅かに其の說敎師なるものが聽衆の心中に寫るぐらゐなものである。

之に反して信仰の熱と力とに依つて爲さるゝ說敎は、言々句々聽衆の心肝を抉り、肺腑に徹し、如來大悲の印象が深く聽衆の胸裡に刻付けられ、而して漸次說敎者その人も聽衆の心に薰入して、遂に渾然として融和し、人法不二の境地ともいふべき情操が催されて來るのである。

彼の近代の德僧、願行院恒順師の如きは、實に眞實の大說敎家で九州の生佛と言はれて、信仰を求むるの人、常に門前に市を爲した事は實に尊き此の例證である。

今現に私の私淑してゐる某勸學を慕ふてゐた吳市の某富豪の如き、其の生前和上の一言一行を模倣して、念佛の稱へ工合、挨拶の仕振、煙管の持ち方に至るまで和上そつくりであつた、斯の如きはこの和上の上に常に佛如來の想ひがして居つたのである、私の亡父誓了院放鱗が萬

行寺恒順師に師事して博多に在るの日、和上の命に依つて市內を傳道してゐた。その個人傳道の如きは短きも二十四五日長きは五六十日も訪問したこの事であつた。「おその」といふ同行之に感激し、其の一生涯を通じて「南無阿彌陀佛、ありがたい放鱗さん」と喜んだ、是卽ち一稱一名、念佛の聲の下に必ず善知識の名を稱へたのである。斯くの如きもその信仰の熱と力とこの上にその人を透して佛如來を感見したと云ふても差支がないと思ふのである。

2、布敎使命の自覺

——敎位と機位——

次に布敎の使命を自覺することである。先に緖論に於て述べておいたやうに、布敎せんとするものは敎位機位の兩面に立つて聽衆に接せねばならぬこの自覺を持たねばならぬ。

3、敎位に立つた時

その敎位に立つた時は

イ、善知識たりこの自覺

ロ、御聖敎を中心としたる說敎

の二つとなるのである。

イ、善知識たりとの自覺

第一の「善知識たりとの自覺」とは、いふまでもなく愚な我々の布教と雖、辱なくも第十七願の諸佛の咨嗟讃嘆と其の位を同じうするのである。故に一言一句も決しておろそかにしてはならぬ、恭敬尊重して最も慇懃丁寧に又權威ある寸分の妥協なき斷定と結論とを以て、「あなた方は」「皆さんは」と言ふ風に對機的に說かねばならぬのである。

ロ、御聖敎中心の說敎

第二の「御聖敎中心の說敎」とは、云ふまでもなく我等の說敎はどうしても御聖敎の指南を離れてはならない。御聖敎の外に指圖はないのである「聖敎は句面の如く心得べし」で、自分の勝手な解釋を加へる事などがあつてはならぬ。隨つて自己の駄法螺や推察や想像を許してはならぬと共に、又寸分でも妥協をも許してはならぬのである。

古來から純信な信者の中にはこの御聖敎に對して實に犯し難い嚴肅さと最も厚き尊敬とを捧てゐる者が少くないのである。昔山田南村といふ信仰篤く且つ宗乘に達した儒者があつた。その

地方では非常に尊敬せられてゐた。この尊き儒者は元より其の信仰を誇るが如き態度などは少しもなく、如何なる說敎者の話にも落涙歡喜して聽問して居つたのであるが、若し其の說敎中に引文の間違ひや義の誤りがあると、竊かにその說敎者を自宅に饗應して靜かにその誤りをあけて、貴方の本日拜讀された引文の中に「斯樣」な御言葉があつたが、あれでは文章も誤り意味も違ふことになる。高祖親鸞聖人でも中興蓮如上人でも實に堂々たる學者で且大文章家であつた、然るに貴方の如く誤り讀まれては、祖師方を傷つくる事、夥しいもので、今日の引文は恐らく暗記の失であらう、以後は深く注意されたいと思ふ、是が私の御法禮である。

と言つて、其の御聖敎の文を示して諄々と之を說き、而して後同行としての不遜を陳謝されて居つた。それで此の地方に布敎する說敎家は深く此の儒者を恭ふて常に誤を正して貰ふて居たとの事である。

實に如來金口の經典、一字一句不可加減の御聖敎を中心としたつゝましやかな說敎であつたならば、言々句々皆光明を放つ態の權威があつて、誰か信を起さぬものがあらう、此の點は我等布敎者の最も深く自覺すべき點であらねばならぬと思ふのである。

4、機位に坐つた時

イ、御同朋御同行主義

機位に座した時は、御同朋御同行主義となつて來るべきものであつて、而して、又、そこには「私は」「この私には」「私は何と云ふ仕合者であらうか」と云ふ風になつて來て自然に「皆さんと共に喜びませう」と云ふ話振になるのであるから

さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかは、なにををしへて弟子といはんぞ、とおほせられつるなり。さればとも同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこそ、かしづきておほせらけり。（蓮如上人御文章一の一）

この趣意に叶ふことになるのである。

又高祖親鸞聖人が多くの場合に一人稱の復數をお使ひになつたのは正しく此の意味であつて、

釋迦の教法おほけれど　天親菩薩はねんごろに
煩惱成就のわれらには　彌陀の弘誓をすゝめしむ（天親讃）

生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば
彌陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける（龍樹讃）

なぞの如きは殊に著しき例證である。

斯樣に一人稱の複數を御つかひになつた聖人の心持を思へば「教んかな」の態度でなくして「共に喜ばん」との御姿がありゝと見えるのである。つまり聖人は田夫野叟の群に等しくして其れ等の人達と肩を並べ、同列に座してあの如來の大悲を仰ぎ給ふたのであつた。

こんな氣持ちになつて說教すれば、一緒に手を握り合ふて諸共に御名の聲を合せ、同一念佛の行者として何の隔てもつくろひもなく、親子兄弟の親しみが取り換はされるのであつて、說き手も聞き手も二而不二の境に達するのである。

ロ、教位機位の調和融合

斯の如く教位と機位とが區畫整然として而も一離一合して、調和し融合する時こそ、所謂鞍上に人なく鞍下に馬なしの味が出て來るのである。丁度汽船で波なき靜かな瀨戸内海を行く時、風光明媚な島々の去來する有樣は、實に送迎に暇がなく然も船が動くところにその船の動き

が忘れられて却つて島々が動いて居るかの如く見ゆるこ同じ樣に、說敎者の動きが自然であるこころに聽衆も亦自然に動いて行くのである。而してこの動きの中心が如來大悲の御心であるのであるから、こゝに眞實の法のまゝなる大說敎が現はれて來るのである。

二、努力と練習

次に說敎講演に就いての努力こ練習である。是について便宜上、

說敎講演の組織
晉聲の練磨
辯舌の練習

の三つに分くる事こする。

1、說敎講演の組織

その組織法

私は說敎こ講演の組織卽ち組立について、常に左の法則に從ふてゐるのである。

說敎＝一主意、一譬喩、一因緣、合法【感情的注入】
講演＝一主意、多譬喩、多因緣、總合【論理的理解】

卽ち說敎は多くの場合感情的注入を主こするが故に、凡ての煩鎖を避け、一主意を闡明にせんがために一つの譬喩こ一つの因緣こに依つて强く深く聽衆の心肝に切込み刻付けてゆくのである。

講演は多くの場合、論理的理解を主こするが故に、一主意を闡明にせんが爲めに多くの譬喩こ因緣こをそれ〴〵の論理に結び付け、最後に之を綜合するのである。勿論感情の裏には理論があり、理論も必ず感情に裏付けらる可きものなるここを忘れてはならぬのである。

以上は正則的の組織法であつて又之に變則のあるここは勿論である。要するに

「說敎は單純にして、深刻なるべし」
「講演は複雜にして、統一あるべし」

であらねばならぬこ思ふのである。

腹稿の作製

次に腹稿を作製するここが尤も必要である、而して一度腹案が出來たならば之を精密に綴りあ

けて、幾度も之を口にかけて練習しなければならぬ、若しその時間がなかつたならば、尠くとも略式に所謂筋書だけなりとも作製することを忘れてはならぬ、この努力を拂ひ得ざる人は決して傑出したる布教家となることは出來ないのである、所謂天才的布教家と云はるゝ人の多くが其の大をなさずして終るのは皆此の努力の足りない爲である。

主意の一貫

説教たると講演たるとを問はず「主意の一貫」を忘れてはならぬ。主意の一貫を失へるものは、説教講演としての價値はゼロである。所謂木に竹を接ぎ、臺灣の話が北海道に終るといふが如きはむしろ滑稽と言はねばならぬ。

正則的の組織

正則的の組織は先づ大聖釋尊の示し給へる法説、譬説、因縁説の三法則や、序分、正宗分、流通分の三原則に從はねばならぬ事は勿論であつて、古來幾多の先輩は之を中心として種々な法則を立てゝ居るのである。

或人は此の組織法に就いて、三分四部五段と分けて説明してゐる。

三分式とは卽ち序分、正宗分、流通分であつて、

四部式とは序、主、事、結の四で

五段式とは序説、法説、譬喩、因縁、結辯の五段である。

第一の三分式の序分とは挨拶であつて、たとへば人の家に行つた時「今日は好いお天氣でミミミ」といふが如きもので、正宗分とは主要なる事柄で「今日參りました要件は云々」といふが如きこと、流通分とは要件が濟んで歸らんとする時の挨拶である。

四分式の第三の「事」とは譬喩因縁の一つを云ふのであつて、先づ序説より主意に移り、それを助顯するに譬喩又は因縁の一つを擧げて、それを合法して結びとめるのである。

五段式とは譬喩も因縁も盡く之を具備して、完全に一席の説教を始終するのである。

茲に私は正則の組織法として左の九段を擧ぐる事とする。

一、講題又は讃題　一席の依據を初めに掲ぐる
二、序辯　挨拶
三、正宗　讃題を説く

四、譬喩　創作
五、合法　事實
六、因緣　創作
七、合法　事實

此の譬喩、因緣を說く中に自然に法說卽ち主意を說く事を忘れてはならない。

八、結辯　凡ての綜合
九、餘波　最後の挨拶

然るに此の正則法に依る時は相當に時間を要する爲め、餘程練習を積まなければ、一時間半乃至二時間の長廣舌となつて聽衆を倦ましめて仕舞ふのである、若しそれ、幾時間の長廣舌にも聽衆を倦ましめざることが出來たならば、それは實に大成した人であるのである。

然れども多くの場合、簡潔にして明確な說き振を必要とするのであるから、右九項目を長短伸縮自在に取扱はねばならぬ。茲に於て變則の必要が起つて來るのである。

變則的の組織

變則の組織法は、前に擧げた或る人の說の內の

序辯——挨拶
正宗——讚題の主意
流通——結辯と挨拶

といふが如き簡單のものとするが、今少し時間があれば

序辯
正宗
譬喩又は因緣
合法
結辯

とするが如きである、それは其の時の場合と時間とに應じて長短伸縮を計るべきである。故に正則を基礎として對機說法し、自由に之を變更し或は序辯を拔きにして直に正宗を說くも良く、譬喩因緣の一つ又は二つを用ゆるか否かは何れも取捨心に任せて婉轉滑脫なる可く、然れども決して〳〵主意の一貫を忘れてはならぬのである。

組織に就ての注意

序辯は挨拶であつて次の正宗分卽ち法說の主意を引起す意味や又は其の法會の趣意や開座の來用なごを述べることで種々な意味を持つて居るものである。

イ 序辯

古來此の序辯に就て種々に研究せられて居る、三五先輩の說を綜合酌酌して左の十二種を擧げて置く、

1、讚題の來由を述ぶ
2、說敎の開かれし事情を述ぶ
3、正宗分を引起す爲めの前提を述ぶ
4、歌又は詩を引用して其の話の端を開く
5、何かの事實を叙して挨拶とする
6、聖句を引いて端を開く

7、問答的、假令ば「各方は何の爲に此の法會に參詣せしやー」等の類
8、假に一つの譬喩を擧げてその發端とする
9、自己の信仰を披瀝して序說となす
10、其の地に來て、初めての因緣の開けし事を感謝して序分に代ゆ
11、無常相を說いて緊張せしめて聽衆の氣分を整ふ

が如きであつて序辯は最初に聽衆の氣分を整ふるの一段なれば尤も緊要の事で冗長に流れず、しかも平易にして莊重であり、又沈着であらねばならぬ。殊に第一席の序辯に於て一敗地に塗れ聽衆の氣分を挿ふることに能はざれば、その一席が全く無意味に終るのみに非ずしてその一會の生命を失ふことにすらなる恐れがあるのである。

ロ 正宗

次に正宗は是卽ち一席の生命であり文章ならば一篇の主意とも云ふ可きである、故に之を說くには命がけで自己の信仰を披瀝し祖意に準據し宗義を闡明し、そこに聽衆をして必ず信念を生ぜしめねばならぬのである。

八　譬喩因緣

正宗の主意を助説する爲にこの譬喩因緣を用ゆるのである、故に譬喩因緣は必ずその正宗分と懸け離れてはならぬのみならず又その譬喩因緣が主體となつてもならぬ、若しそれ譬喩因緣が主體となつて正宗が隱蔽されたならばそれは單なる宗教的講談に終るが故に大いに殊に之を愼まねばならぬのである。

二　流　通

流通は一席の結論なれば、是も亦大いに重要であつて、その結論に注意せざれば何かすると龍頭蛇尾に終ることが多いのである。故に實に注意すべきことであつて所謂百尺竿頭一歩を進めて壇を下るの慨があらねばならぬと共に老婆親切の態度に於て佛陀の大悲に安住し慇念の誠意を殘す可きである。

組織法餘論

以上述べた處の正則と變則との組織法は只その一端に過ぎないので之を基礎として縱横無碍に變化さすべきである。だから「讃題につひて離れてまたつひて、花が咲いたら、それでおくべし」

といふ歌があるが實は花が咲いた丈では、も一つ物足りない、そこで是非實をつけねばならぬ。

或る人が

根、幹、枝、葉、花、實

の六段を擧げて居るのも餘程面白い方法で、私の主張して居る「自然の模倣」といふ心持によく合ふのである、一席の根底となる主意があつてそれからその論理的の幹が出て、そこに又論理を裝飾する各種の曲折波瀾した細論的の枝葉が繁り譬喩因緣の花が咲き大結論の果實を結んで初めて大說敎大講演となるのである。

その他

一、因緣より論理に及ぶ、二、論理より因緣に及び、三、譬喩より論理に入る、四、論理より譬喩に入り譬喩より因緣に及ぶ。

といふ如き組織の方法もあるのである。

普通言ふ處の「辯」なるものは多くその一段の話の最後を飾る結辯の意味であつて其の短きものも又長きものも論理及び說話が自然の感情に、移り來つて其が又自然の抑揚頓挫を現はし來た

つたものである。故に其の辨なる物が朗詠體にもせよ又朗讀體にもせよ或は對句累辭體にもせよ、勉めて感情の自然發露に伴はねばならぬものである。されば華麗流暢の辨なき說敎も講演もそれは共に、花なき草の如く、又香なき花の如きものである

要するに茲になるこ說敎講演も文章こ同じもので、その文章が雙關法こか或は冐頭格こか立柱分應法こか草蛇灰線法こかこいふが如き方式に依つて組織される如く說敎講演も亦變化に富んで然もその主意を一貫すべき方法に依つて之を組織せねばならぬのである。

音聲の練磨

音聲は實に說敎の第一要素である、音聲なきこころには說敎はないこいふても過言ではあるまい、古來說敎の仕方に就て。一聲二節三調子こ云ふて居るが是れ苟くも聲樂詠歌吟詩讀經凡て音聲に關するものであれば皆この聲節調子を必要こすることは云ふ迄もないがその第一は矢張り音聲であるのである。

思ふに說敎でも講演でもその組織や學問や話材は喩へば彈藥の如きもので音聲は鐵砲である。彈藥が豐富でも鐵砲がなければ到底戰爭が出來ぬのこ同じで、音聲がなければ說敎は出來ぬの

である。故に此の音聲を如何に敎養するかゞ問題である。

故造の聲

聲は相當の練習に依つて所謂造り聲が出て來るのである。世に「寒聲」なゞゝ申して隨分苦しき修養をなすものがあるが、何うかするこ「聲の取り損ひ」が起つて是が爲に大變な失敗をなすことがある、中には生涯全く「枯れ聲」こなる人も少くない。これは無論亂暴なやり方をして聲帶をこはしたのであるが、何れにしてもこの故造の聲は何こなくこゝさらゝしき點が見えて幾分下卑るか又は浮薄な嫌ひがあるのを遺憾こするのである。私も曾てこの「造り聲」の爲に大分惱まされて、天然の聲に復する迄には相當に苦心したことがある。この『造り聲』は多くの藝人の用ゆるものなるが故に、この造り聲で說敎をして居るこ、そこには種々の批評を受くることは已むを得ない事で

役者聲
淨瑠璃聲
浪花節聲

謡曲聲
俗歌聲
三味線聲
銅羅聲

といふが如き弊に陥り易いのである。

自然の聲

自然の聲は、その人々の天性本然の聲が鍛練されたものであつて更に僞りのない無理のない聲である。この聲こそ

1、肺肝より出る聲。2、人の肺腑を抉る聲

であつて、この自然の聲でなくては莊重な而ふして親切な話は出來ぬのである。前にあげた聲の中でも謡曲の聲等は割合に自然に近い聲とも云はれて居るのであるが、やはり何となく造り聲の臭味が離れぬのである。然しながら如何に天性の聲とはいへ、その聲が

蚊の泣くが如き聲
悔むが如き聲
大風に灰捲くが如き聲
寝言の如き聲
獨言の如き聲
脊捲くが如き聲
上すべりのする聲
大音無力の聲
ごもり聲

などゝいふが如き聲であつたならばそれはまことに氣の毒なもので、かゝる聲はやはり練習してその癖を直さねばならぬのである。

練習の方法

私はこゝに於て天然の音聲が願くは極めて自然的に練習されて自然にその音量や音力が進展されてゆくことを希望するのである。卽ちやはり「自然の模倣」であつて假令ば水の音の如き、

瀬に當りては滔々と響き溪に落ちては瀧々と鳴り、せゝらぎの優しき聲の餘音嫋々たるが如き、怒濤の岩を嚙む響き、さゞ波の砂濱を洗ふ聲、皆吾等の手本ではあるまいか、されば、自分の天然の聲を殺さずして、自分のほんとうに怒る時の聲、笑ふ時の聲、泣く時の聲、そのまゝを、そのまゝに說教講演の上に移すのである。けれども、そこに先輩や朋友のそれを聞いて、若しそれが自分に感銘される時は之を模倣せんと努力せねばならぬが、しかし決して自己の天性の聲を殺してはならぬ、かくして、之に共鳴して、無理をせぬ範圍に於て努力練習して居る間に、そこに、自然に一の音聲が豁然として現はれて來るのである、故に自己本然の聲を知つて努めて不自然を避けて之を助長して行く可きである、此して行く間に、ことさらゝしくない故造の聲と自己天然の聲との兩者が調和せられて一種言ふべからざる甘味のある聲が出て來るのである、故に私は自己本然の聲を自然に鍛練して行くことを主張するのである。

或る謠曲の大家が其の初め自分の無能を恥て家を逃れて山中に入り自殺せんとした時、傍らの瀑の聲が微妙に響くを聞き豁然として悟り、それからこの瀑の前に立ちて極めて自然に謠ひ出したのである、最初は瀑に妨げられて吾が聲が吾耳に入らなかつたが半年の後には尠しく吾が耳に

聞へ出したので、それから益勇を鼓して練磨して行く内に一年二ケ月頃には漸く瀑の聲と併行するに至り三年目には遂に瀑の聲を壓し去るまでに至つた、然しその聲はさう大聲でもなく極めて自然でさうして如何なる大堂にも響き亘るの音聲となつたと云ふ事である。

私の洗心學舍の同人で今は相當に布敎界に雄飛して居る某君の如きも、最初は所謂蚊の泣くが如き聲であつたが、刻苦實に二ケ年、自然の修養を積みたる結果、今日では優に二三千の大衆を壓し去る如き聲の持主となつて居るのである。

發音の注意

如來に八音があると說かれてある。八音は正に吾等の模倣すべきもので、平素の注意がこの八音を出したいと心懸くれば自然にそれに近づくことが出來ると思ふのである。八音とは

(1)、極好音
(2)、柔輭音
(3)、和適音
(4)、尊慧音

(5)、不女音
(6)、不誤音
(7)、深遠音
(8)、不竭音

であつて、若し吾等がその萬分の一にでも達し得たならば、實に音聲の自在なることは想像の外である。されば吾等は不斷の努力を以て、聊かでも是に近づかんことを願ふべきである。

而してその發音時に於ける注意としては、如何なる美音も大音も當初より直ちに之を出さんとすれば必ず音聲を痛むるものである、故に除々として低きより高きに達せしめねばならぬ、咽喉にしても自然に此の音聲を出すに從つて分泌の量も增して來るのである。而して亦咽喉と神經の關係は實に密接なもので、精神上の興奮や憤怒の咽喉に及ぼす影響の頗る大なることを考慮して發音の前には努めて平靜の態度を取ることが尤も必要である。

發音と攝生

音聲が生理的に健康、殊に腎臟胃腸及び咽喉との關係が密接なること勿論なれば、此の健康の注

意を怠つてはならぬ。而ふして其關係の尤も大なるものは

睡眠
飲酒
婬慾

の三つである、睡眠の過不足も注意せねばならぬが別して過度の飲酒婬慾が音聲に及ぼす弊害は實に直接であつて、殊に布教家の甚深の考慮を拂ふ可きは、此の如きものが、人格の低下と共にその氣品と說教の氣力を奪ひ、以て大法を汚すことであるのである。

3、辯舌の練習

前節に於て、說教講演の第一要素である音聲について述べて置いたのであるが、さて如何に音聲が立派であつても、辯舌がさはやかでない時は、思想の發表が思ふやうに出來ず、從つて如何によく佛意を傳へんとしても、充分に聽衆に徹底せしむることが出來ない事となるのである。こゝに辯舌の必要卽ち雄辯の必要をみるのである。雄辯といふことになれば、前に述べた如く已にそれが一種の科學として研究されてゐるのであるから、雄辯法又は雄辯學といふが如き參考の書

は相當にあるのである。故に雄辯の論理はさういふ書物に讓つておいて、今は私の體驗のまゝを述ぶる事にする。

自然を模倣せよ

おほよそ學問と修養とを問はず、その模範を自然に取り、天然に倣ふといふ事が眞實の道であつて、かうなれば決して無理がない事になる。先づその最も簡單な例で之を云へば、卽ち春夏秋冬である。春は悠々として百花を開き、夏は蒸々として生物を長養し、秋は肅涼として凡てを堅實にし、冬は寂莫として萬物を收藏する。辯舌の法則も亦復斯の如くであらねばならぬのである。穩かに語る時は春風の亘るが如く、廣やかに且豐かに語る時は夏の蒸々たるが如く、感傷の言は秋風の落葉を吹くが如く、辛辣の語は嚴寒の骨を削るが如くあらねばならぬ。此處に於て佛は四無礙辯を說き、又四悉檀をも敎へて居られるのである。

四無礙辯とは云ふまでもなく、義無礙辯、法無礙辯、辭無礙辯、樂說無礙辯の事であつて、義無礙辯と法無礙辯は一切諸法の義理義門を更に滯るところなく自由自在に說く事であつて、辭無礙辯は上の諸法の名字義理について之を說くに、例へば今日では各國の語學を以て之を說き、進

んでは鳥獸蟲魚に至るまでその各〳〵の言葉を以て說き聞かしむるといふ程の意味である、樂說無礙辯とは對衆に應動して、その聞かんと樂ふところの法を說いて、之を自由自在に聞かせ得る事であるのである。

辯舌の修養

辯舌といふ事は決して冗舌といふやうな意味ではない。冗舌といふ事は無茶苦茶に喋べる事で、これは說敎講演には却つて邪魔物であつて、所謂冗舌家が大布敎家になつたやうな例は殆ごないのである。殊に說敎に於ては、この冗舌は最も弊害の多いもので、云ふまでもなく大法の宣流には、冗舌所謂たゞ無茶苦茶に喋べる事は、法の尊嚴を傷つけ、聽衆をして同じく尊高なる法を輕賤せしむる事となるのであるから、最も注意しなければならぬのである。

故に喋べるといふ事が必ずしも今言ふところの辯舌でも雄辯でもなく、又訥辯といふ事が必ずしも悲觀すべきものでもない。要は練習と修養とにあるのである。

修養上の注意

故に說敎にしても講演にしても、その辯舌の修養には、左に擧げるところの五ッを先づ大體の

方針として練習すべきであると思ふのである。

一、壯重なるべし ― 野卑なるべからず。
二、輕妙なるべし ― 鈍重なるべからず。
三、懇醇なるべし ― 不親切なるべからず。
四、明確なるべし ― 執拗なるべからず。
五、熱烈なるべし ― 輕薄なるべからず。

以上の五ケ條は極めて簡單なものであるけれども、又その一方針とすることができると思ふのである。

古來よりの教訓

古來この辯舌について、七病、八病、又は九病十病などと擧げて、この辯舌の弊害を指適してゐる、今その一二を擧げて參考に供する事にする。

七病とは長談病、高聲病、理窟病、單調病、脫線病、累句病、閉眼病と云ふが如きものである。

長談病、これは所謂下手の長談義である。

高聲病、これは最初から徒らにキャン〳〵聲をはり上げる事で、聽衆は全く頭の上で半鍾を叩かれるやうな氣持がするものである。

理窟病、これは只理窟を並べるだけで石垣のやうな話である。

單調病、千偏一律、何の變化もなく、たゞ聽衆を眠らしむるが如きものである。

脫病線は枝葉の末に走つて、最初は長崎の事を云ひ始めて、遂に北海道の話に終るが如きものである。

累句病は感動詞や接續詞を連發する事で、ソコデ、卽チ、トリモナホサズ、全體等といふ言葉が一席の間に二百、乃至千位出づるのを云ふのである。

閉眼病はよく目を閉づる事で、中には最初から終りまで目を閉てゐる者もあつて、目を開いてみると已に聽衆は一人も居なかつたと云ふ話すらある。

その他學問病、議論病、麗句病、叱責病、廣告病、惡口病、幽靈病、悲哀病、役者病、單獨病、稱揚病、阿諛病、新語病等と擧げきたれば限りはないのである。

學問病とは學問を眞つ向から振りかざす事で

議論病は所謂會讀流で全く議論を主とするものである。

麗句病とは只徒らに奇麗な句調を用ゆるだけで、何の意味かゝわからぬ事。

叱責病とは聽衆及び同行を叱りつける事

廣告病とは誇大に自家を廣告する事、

惡口病とは一名排他病とも云つて、どこまでも他を排斥し、吾一人ならでは眞の道を說く者なしと云ふが如き惡病、

幽靈病とは話も聲も共に幽靈の如く足がなくて、最後にはスウーとどこかへ消えてゆくもので

悲哀病とは說教は感情を惹かねばならぬと心得違つた結果、出來るだけその句調を悲哀的に語らんとするもので、

役者病とは態度音聲凡て役者を模倣したるもの。

單獨病とは對衆が理解しやうとしまいとに論なく、只自己の言はんとするところを語れば足るといふが如く、全く對機的の考へのないものである。

稱揚病とは聽衆をおだてほめあげるだけで

阿諛病とは聽衆におもねる事である。

新語病とは新奇な語句や術語を案出し、創作して新しがりやを氣取る氣障な病氣である。

以上の如きものの中から之を取捨して、或は八病といひ、九病といひ、十病と言ふのである。

之を要するに結極前に擧げたところの五ケ條の布敎の練習修養の注意が最も大切なものである。

尙ほ又對話例へば問答體に語るが如き事、又は對句卽ち美辭麗句をあげて之を文學的に語つてゆくなどの如き練習が最も必要である。この外に私は私の體驗より特に辯舌上の注意として

一、語尾の最も明晰なる事。

二、前と反對に語尾の音聲をかすめて餘韻を引く事。

この二ツを擧げる事にする。

第一の語尾を最も明晰にする事は、聽衆に理解を與へると共に快感を覺えしめるもので、卽ちハギレのよい言ひ方である。

第二の語尾をかすめて餘韻をひく事は、感情を惹き起さしむるに最も大切な辯舌の使ひ方であ

つて、この辯舌が缺ぐれば巧に因緣なごを語る事は出來ないのである。說敎も講演も已にその生命の大部分が感情にあるこすれば、この感情的辯舌の修養は最も必要な事であるこ思ふ。

近代大家の實例

筑前福岡德榮寺の大野義溪師は明治維新當時の大布敎家であつた。因緣を說くに最も妙を得た人で、噂によるこここの義溪師が大阪の津村別院に於て說敎をされた時なごは、さすがの道頓堀の千兩芝居が中止されたこいふ程の事である。それほご熟達せられるについては、その練習たるや實に苦心慘憺なもので、僅に「可愛さうーにッッッッッッッッ」の一句のために、三ケ年間後堂で鏡に向かつて練習された、その三ケ年の末に女中が御飯の案內にきた時、その女中の顏をみて「可愛さうーにッッッッッッッッ」こ言はれるこ、この女中か思はず兩手をついてホロリこ涙をこぼして「あら若樣のそのお言葉で私は思はずホロリこいたしました」こ言つた時、義溪師は膝を叩いて「あゝこれでよいッッッッッッッッ」こて始めて高座上の人こなられたこいふ事だが、案に違はず終に天下を風靡する布敎家こなられたのである。

又豐前の八屋の賢明寺の大江覺成師も同じく明治時代の大家であつたが、嘗て私がその苦心

談を尋ねた時『天雨妙華虛空から蓮華がバラ〳〵バラ〳〵バラ〳〵ッッッッッッッッ」これだけの一句を實に四五千遍、每日〳〵夜も晝も云つて言つて言ひ訓して居る間に、不思議な事にはこう〳〵その最後には この「天雨妙華、虛空から蓮華がバラ〳〵バラ〳〵ッッッッッッッッ」こ言ふこ何だか如何にも蓮の華がバラ〳〵バラ〳〵こ散るやうなかんじになつてきたのである。それからこいふものは何時五十三佛の話をしても、この一句に及ぶこ、高座の上で之を言ふこやはり御堂の中に蓮華がバラ〳〵こ散るやうな氣持になつてくるのである』こ申された。

これは少し模樣の違つた例であるが、前の泉涌寺畔翠靜溪の聲社の前を「みやこ商會文化バン」こふれ賣して歩く男があつた。それが何こもいへぬ聲で、聞いてゐるこつひ買はねば居られぬやうな氣持になる音調をおびてゐるので、ある時この男に「そのふれ賣の聲はごうしてそんなにうまく出るのか」こ尋ぬるこ、彼は「最初は顏が眞つ赤になつて可笑しくてなか〳〵出なかつたが、之を賣らねば生活ができない、是非買うてもらひたい、賣りたい、こいふ精神から一生懸命になつて半年ばかりやつてゐる間に自然にかういふ聲が出てきたのである」こ答へた。これは極めて簡單なやうだけれごも、前にあげたこころの先輩大家の努力談こ相俟つて我々後進布敎者の最も

注意せねばならぬ事であり、模倣せねばならぬ事であると思ふのである。

4、結　論

上來修養と練習について相當に説教講演の組織、音聲と辯舌との練磨について述べきたつたのであるが、兎に角報謝の觀念に生きて教人信の聖務に立たねばならぬといふ信仰に立つてこそこの努力も練磨もこゝに初めてその意義を有する事になるのであることを深く自覺してその道に進むべきものである。

左の二首は古來この練習について人口に膾炙されたところのもので、之を擧ぐる事にする。

讃題についてはなれて又ついて
花が咲いたらそれでおくべし

説教は聞け書け語れ座を重ね
人に尋ねて辭を直せよ

三、布教上の注意

1、平素の注意

我々が布教を生命とするといふ點から考うる時は、我等の全體が布教であらねばならぬ。されば生活そのまゝが布教であつて、坐作進退、起居動靜、行住坐臥凡てがみな布教であり、説教であるのである。

故に平常の談話卽ち茶話までが盡く説教化されてゆかねばならぬ、他人に對する時でも、家族間の談話も亦車中の談話も凡てが皆説教であるのである、殊にその家族の者を感動させる事の必要な事は云ふまでもない事で、家族が感動しないやうな談話は、決して世人を感動させえないものである。ある布教家がその家族の者に常に批判を乞ふて居たといふが如きは實に我々の倣ふべき事であらうと思ふ。

而して尙平常の動作の如きも常に我は僧侶也、布教家也といふ考へを以てゆく時にそのまゝがそこに一つの布教となつてあらはれてくるのである。これが申さば布教三昧といはるゝのである。かういふ眞劍な態度を以て平素から凡てに注意してゆかねばならぬのである。

2、布教者の態度

——相好、姿勢、珠數、袈裟、聖典に對する態度——

次に布教者の態度、これが又極めて大切な事であつて、高座上にあるこ平生安坐の時こを問はず、その態度が嚴肅穩雅であらねばならぬ。蓋し嚴肅は知慧の發露であり、穩雅は慈悲の顯現であるからである。故に最も慎しまねばならぬ點は淫邪の相好、傲慢の態度、卑屈の姿勢、落着きのない形なごである。中にも淫邪の相好は極めて深く注意すべきものであつて、清少納言も、にくきものをあげた中に、「法師の女をみる眼もこ」こ嘲つてゐる。

次に發聲時の容貌であるが、聲が自然に大きくなり、力が入つてくれば從つてその容貌にも變化をきたすものであつて、この時こ雖もかねてからよく注意してその顏貌が醜惡になつてはならぬこの考へをもつて居らねばならぬのである。

次に講演又は高座上に於ける姿勢であるが、之については古來一ッの法式卽ち型があつて、例へば出仕する姿勢の方法や又は演壇に立つ時の態度姿勢、その他高坐上の威儀、又は御文章箱の取扱ひ方、中啓の持ちやう、念珠のつまぐり方、又は談話中に頭や手を動かすこいふ事、手や扇子にて演壇を叩くが如き、又は演壇上を歩くこいふが如き事についてのいろ〳〵の方法を定めてゐるのであるが、私の體驗から云へば、是は餘りに型にはまる事よりも一應の型を知つて、そ

れを參考こし、然る後は自己の性格に準じて努めて自然にまかすべきものであつて、熱起り情わく場合には覺えず手をあげて壇を叩くも何等聽衆に惡感を與へざるのみならず、そのまゝが聽衆をひきつけ聽衆こ一致する事になるのである。これが實に自然であつて、只その大いに注意すべき點は、身自らの精神が前述の如く、嚴肅穩雅の基礎である如來心の知慧こ慈悲こに安住してゐるか居ないかを反省すべき事である。

この考へで居れば必ず威儀を正しくして決して不行儀な點のあらう筈もなく、又御文章を拜讀する態度も極めて謹嚴鄭重で、又佛前の拜禮の如きも同じく壯重の態度こなつてくるのである。

よく聞く事であるが、芝居の役者も名人になれば六月の炎天にあの厚い衣裝を着、相當な仕ぐさをしながら、舞臺では決して汗を出さず、樂屋へ歸つて始めて一度に汗を出すこいふ事である。相撲でも名人になるこ同樣に取組中には決して汗を出さないこいふ事である。昔の有名な布教大家の中には、その說教中には汗一滴も出さず、終つて後わくが如き汗にぬれたこ言つてゐる人もあるのである。斯の如きは皆平素の注意がかういふ結果に至らしめたものこ思ふのである。

3、實際時の氣分

實際時の氣分が又最も大切なものであつて、この氣分が整はざれば感情も思想も共に統一を缺ぐのであるから、その一席の講演も說敎もたゞひ腹案や草稿が何程巧に出來てゐても全くそれは死んでしまふ事になる。故にこの氣分が一番大切な事である。凡ての講演に於てすらこのゝほりであるのに、況んや我等の說敎講演は、懸つて出離生死の大問題であり、生命上の實際を握つた信仰の問題であるが故に實にこの氣分ほゞ大切なものはないのである。

故にその實演の前にあたつて、例へば腹をたてるか、酒を飲むか、又はその他の雜念を起すゝいふが如きは、特に注意せねばならぬのである。されば先づこの氣分を整ふるについては、自分を機位に置いては罪惡感に入り、無常感に入り、敎位に坐しては大悲三昧に入るのである。かくしてこそ自分の上にほんたうの信仰の感味がわき、その高座に上らざる以前に、已に云ふこゝの出來ない法悅の光が自分自身の上に輝くのである。この觀念の下から法を說く時こそ初めて如來の大法を宣流する事が出來るのである。

願行院七里恒順大德は、高坐に上られる前、三十分乃至一時間は御自分の居室に於て一切の人を遠ざけ念佛三昧に入られたゝいふ事であり、又私の父誓了院放麟は內陣に坐してその感じが

湧いて來ない間は容易に高坐に上らなかつたのである。而して常に私に語つて「自分が言ふて自分が聞いて自分が有難いゝ思はぬ事は決して說敎の上で話してはならぬ。さうして自分の心に、今日は又如來の御代官をつゝめさして頂きます。私は同行達をお淨土へひきたててゆくゝころの大切なお役目を申しつかつた。何ゝした幸福者であらうか實に勿體ない、かういふかんじがほんたうに起らぬ間は高座に上つてはならぬ」ゝ言つてゐたのである。

尙ほ又先年物故された司敎江田常照師は、說敎前必ず人を遠ざけて蒲團を被つて三十分乃至一時間の冥想に入つて居られた、而して師は常に言はれて居た「私の說敎を邪魔しようゝするならば、それは私が高坐に上るまで私の前で話す事である」ゝ。故に私も現に今この流儀を實行してゐるのである。

第二、法

上來述べきたつた如く如何に辯舌巧なりゝ雖、學殖なきものは到底傳道宣傳の大布敎家たるの要素を缺いてゐるゝ言はねばならない。併しながら如何に學殖ありゝ雖も信仰なき時は、これはむしろ學殖なきに如かざるものにて、この點大いに注意せねばならぬのである。詮ずる所信仰

と學殖と辯舌とこの三ッを具備せねばならない。この理想的人格の完成は之を大聖釋迦牟尼佛にみる事ができる。故に我々は少くとも少釋迦佛たるの抱負を持たなくてはならぬ。かういふ所からして明治の初期から中期あたりまでは布教に少し出色ある者に向つては、之を名付くるに今釋迦、今彌勒といふ言葉を以てしたのも面白い言ひ方であると思ふ。

故に信仰と學殖と辯舌との三つが完備すれば所謂鬼に金棒で、ゆくところとして可ならざるはないのである。

一、宗　乘

その學問とは宗乘、餘乘、科學の三つであつて、宗乘とは卽ちその宗旨の獨得的學問であつて、吾が淨土眞宗に於て之をみれば、眞宗獨得の法門、往生淨土、信心正因、稱名報恩といふ今家の所立法相の一般的知識をいふのであつて、勿論この學問は信仰と一致した學問であらねばならぬ。

二、餘　乘

これを助くるに餘乘卽ち佛教概論的な通佛教の常識、尙ほ廣く言へば宗教學の一般的常識を養ふことである。今、淨土眞宗より之を言へば聖道淨土の二門の混雜せるが如き、尙ほ思想と宗教

との混同、佛耶兩教の混淆したるが如き話は全く宗教の一般的知識、佛教概論的常識の缺亡からきたるものと言はねばならぬのである。

三、科　學

次に科學であるが之も一般の科學的常識を具へる事が必要で、この點も深く注意すべき事である。

四、布教上に於ける學問の注意

由來、布教家の通弊は研究心の足りない事、露骨にいへば早ノミコミをする點である。故にこれがためには、一應の常識としてその問題の研究をするといふ事を忘れてはならぬのである。

然りと雖も反面に科學にも餘乘にも深くない知識を、如何にもありさうに振舞ふ事は極めて愚劣な事で、却てそのために專門たる宗乘にまで累を及ぼす事が少くないのである。故にかゝる點は自己を空しくし、謙遜な態度で之を語るべきであらうと思ふ。世の新しがりやの中にはえてかういふ點に失敗する者が多くあるのである。嘗つて九州帝國大學の佛教青年會に於て、相當の知名の青年布教家が、その話の引例として科學上の問題を得たり氣に語つた事がある、後で青

年會の幹事の人が次の事を私に告げて「布教使が我々の前に科學上の話をされる事は非常に愼しんで貰いたいもので、この前二人の布教使が、盛んに科學の引例を出されたが、それは古い話であり、且つ相當の誤謬があつたものでそれをえたり氣に說かれた時、之をきいてゐた學生や教授達は皆苦笑してゐた。之をみた最眉目の我々は手に汗を握つたのである。科學の科學を研究してゐる我々の世界からは、氣毒以上むしろ噴飯に堪へないものであつて、之がために後から出てくる專門の話までが有難くないやうに感じた。故に科學の引例を是非せねばならぬ場合は、謙遜な態度で之を語るか、出來うべくんば語らない方がよいのである、むしろ只一途に專門の話を諄々と說かれた方がよほど効果は多いやうに思ふのである」と云つた。かういふ點は科學を語る時の注意としては誠に大切な事であると思ふ。

五、結論

之を要するに、その所說の法である所の第一の宗乘に於ては、信仰を基礎としてその所立の法門の的確なる大體をとらへ、すゝんで餘乘及び科學の一般的の常識を供へて、而してこの點はどこまでも謙遜に出で之を助說すべきものであると思ふのである。

最後に附け加へておかねばならぬ事は、學問と信仰との關係であつて、學問は理想に走つて根底がないのであるから、言はゞ底のない桶と同じ事で、つまり斷定的な結論をもたぬ場合が多いために、空言空論に流れ易い傾きがある。信仰は實際の事實であるが故に、この信仰に立脚して法を說く時は、如來の法なるが故に御代官といふ心が起り、獲るところを慶ぶ點からは御同朋といふ考が起つてくるのであるから、何れも所謂聖教量に據して斷案と結論とをもつてゐるのである。眞實の御宗乘と言はれるものは幾度も述べたるが如く、この信仰を基礎としたる學問であるのであれば、この學問あり、信仰ある時には、鳥の翼ある如く眞實の傳導攝化の聖業を成し就ける事ができるのである。

第三、機

一、所對の機

所對の機即ち聽衆といふ事については、種々な考へ方があるのであるが、ここに佛教の立場では、彼の維摩經に「佛、一音ヲ持ツテ法ヲ演說スレバ、衆生ハ類ニ隨フテ各解ヲ得ル。」とあるが如く、その聽衆が種々に分れてくるのである。故にここが最も困難な所である。

二、大衆的聽衆の三大注意

故に先づ一般大衆を向ふにまはしての說敎講演となれば、この考を特に嚴密にしておかねばならぬのである。或る布敎の大家が、「講座の下には、佛もあり、菩薩もあり、聲聞も緣覺もある。乃至、各種專門の博士もあり、勸學あり司敎あり、而して又極めて低い無識者階級があると思ふて、その何れにも失望をさせぬやうに話さねばならぬ」と、云はれた事がある。又、或大家は、「場內の八分が感激しても、二分の誹謗者があればその說敎は極めて價値のないものである。反對にさまでの感激はなくても、一人の誹謗者も出さず、成る程宗敎家の話はあゝいふものであるかなあと、今迄宗敎の話をきいた事のない人が理解する樣な說敎が、卽ち說敎としての成功である」といふた事がある。

對機中に尙ほ對機を作ることが必要である。それは多數の聽衆に向つて、一つの所信を述べんとする時、その話の徹底したか否かを知らんとするには、どうしてもその聽衆の中に一人又は二人の對機、卽ち「正所被ノ機」、相手を作つてその一人又は二人の目當ての者の、領解隨喜の模樣を見る事が極めて必要な事である。先輩の人で、斯の如き注意を持つた人も決して少くないので

ある。

以上擧げた所の三つの注意は、大衆的說敎の場合に非常な參考となるものである。

三、大衆的聽衆の群集心理

大衆的聽衆には云ふ迄もなく、群集心理のある事を忘れてはならぬ。それは、大衆的聽衆は、その個人意識が非常に弱くなつて、共通の意識か强くなる爲に、その集合意識の場合には、知識の側よりも、感情の側に共通する事が多いのである。故に群集的な大衆に對する時は、この呼吸を忘れてはならぬのである。群集的大衆の場合には、一般にその理解が低下するものであるから、その話の仕方の上には、絕對的な、而して簡單明瞭な、又感情的な話の方がよく徹底するのである。

群集心理の特別な點は、前に申した如く、個人の意識が割合に消滅して、熱狂とか、憤激とか、輕信と云ふ樣な事が强くなつて、同時に又僅かの衝動の上に非常に移り易く動き易いのである。そこでこの機微をつかむ事は最も大切であつて、之は善い方にも動き易く、又惡い方にも動き易く極めて煽動性に富んで居るので、政治演說や、社會問題の演說會等が、よく大人氣を博したり、又は混亂に陷つたりするのは、此の點であるのである。よく煽動政治家等といふものが、大きな

聲で亂暴な言葉を使ひ、最も刺戟性に富んだ排他的の演說が、一時的にもせよ人氣を博するのはこの理由であるのである。

最も吾等宗教家の群集的大衆には、殆んどかういふ事はないのであるけれども、然しながら、此の群集心理を善用して行くといふ事は最も大切な事であるのである。

四、聽衆の特種性についての考慮

1、立てる聽衆と座せる聽衆

立てる聽衆は割合に暗示にかゝり易く、反對に座せる聽衆は割合に動かし難いと共に、少しこみ入つた話でも呑み込み得るのである。

2、男性と女性

女性は男性よりも感情的であり、且靜かにきく事を好むものである。男性は女性よりも、理性に富むものであつて、隨つて又强くきかされる事を好む性質である。

3、老人と青年

老人は保守的に流るゝ傾向があり、青年は進步的である故に、老人は過去の追憶に興味を持ち、

青年は未來の希望に興味を抱くものである故にこの點に注意すべきである。

4、職業別

その職樂によつて、その嗜好や趣味を異にしてゐるのであるから、之を考慮せねばならぬ。

5、限定せられたる聽衆

講習會、婦人會、青年會、女子青年會、在鄉軍人會、戶主會、主婦會、工女團職工團等の如き限定せられたる聽衆に對しては、その團體的聽衆の性質を考へ、而して又、その聽衆數の多少によつて、臨機應變の覺悟をなさねばならぬのである。

6、信者階級

信者階級には、純信仰的に佛德讃嘆報謝相續を進むべきで、何處までも法味愛樂の考へであらねばならぬ。臨床法話の如きも、その機に應ずべきは勿論なれども、純信仰をすすむべき事は云ふ迄もない事である。

7、有識階級

有識者階級には勿論論理的說明を中心とせねばならぬのであるが、然しながら單なる冷やかな

論理上の話は却て多く失敗に終るのである。故に實際的に又合理的に然も多量な感情を含めて正確な譬喩因緣をもつてする事が必要であつて、私の體驗から云ふても、宗教を求めてゐる有識者階級は、割合に說明を快よしとせずして、却て論理歸納を持つてゐる感情の話をよろこぶのである。世の學者階級に比較的迷信の多いやうなのはたしかにこの機微を穿つた實例だと思ふのである。卽ち迷信は多くの場合論理的のものでなくて、むしろ感情的のものであるからである。

8、無識階級

比較的に知識の缺乏した者には、そこに譬喩因緣といふものの必要があるのであつて、佛の三周說法の所謂譬喩因緣說は之が爲であつて、隨喜開導とは卽ちこれである。

9、批評者及誹謗者

すでに足一歩宗教說話の堂塲內にいること云ふ事は、そこに早因緣が催されてゐるのである。無關心の人達よりも、數等、數十等進んだ人達である。さればたとひ誹謗者でも所謂「よごれぬものは洗はれもせず。」の狀態で、之を感化して引入れる所に布教の權威がある。

故に大衆的にも亦個人的にも、論理的に之を對破するの得失は、大いに考慮をせねばならぬの

である。若しそれ、その論理的對破や、面罵的叱責の爲に、却て益〳〵佛教嫌となすといふが如きは極めて重大な事であつて、此の點は吾等の非常に注意せねばならぬ事である。然もそれが多く吾等の不謹愼や不注意な辯舌から、かういふものを作り出すと云ふ事になれば、最も大なる懺悔を拂はねばならぬのである。私は私の過去の布教生活の體驗から、特に此の點を大聲叱呼しておき度いと思ふのである。それは聽衆を惡罵する事によつて、又は非常識な材料によつて、又は下卑な口調によつて、又は不謹愼な態度によつて、かういふものを造り出す事は、實に佛祖に對して申譯ない次第であるからである。

さればむしろ諄々として正道をとくの勝れたるに如かざるを思ふのである。勿論場合に於ては、堂々と正面的に論理對破を誠みねばならぬのであるが、その何れにしても、和顏愛語と宗教的の感情を持つて之れに對して行かねばならぬ、古來、此の例は決して少からざるもので、親鸞聖人の辨圓に於けるが如きも、その著名な例であるのである。

10、富樓那の話

雜阿含經の中に、富樓那の話が出てゐる。

或る時富樓那が、佛に對つて「私は之から西方輸盧那國に布教に行き度いと思ひます」その時佛が「輸盧那の人々は、その性質が兇暴であるから、若お前を罵り恥かしめた時はどうするか」富樓那「彼の國の人が私を罵りましても私はかう思ひます、輸盧那の人々は賢善で智慧があるから、たとひ罵しる事があつても、石をもつて打つ事はあるまいと思ひます」その時佛が「もし石をもつて打つた時はどうするか」富樓那「輸盧那の人たちは賢いから、石で打つても刀で切る事はあるまいと思ひます」佛「刀で切つたらどうするか」富樓那「私は信じます、輸盧那の人々は賢善で智慧があるから、刀で切つても殺しはしますまいと」佛は又「殺したらどうするか」富樓那「私は信じます、輸盧那の人たちは賢善で知慧があるから、たとひ殺すに致しても、無理な殺し方をせずに樂に殺してくれると思ひます」之をおききなさつた佛は「善哉ノ〳〵、富樓那よ、汝はよく忍辱を學んだ、汝に限つて輸盧那國に止まつて布教する事が出來るだらう、ゆけ富樓那よ、而して輸盧那國の人々を教化して、立派な佛の道に引き入れ、涅槃の道に入れしめしてくれよ」と之を許されたといふことである。

11、和顏愛語の力

私の父、誓了院放麟が、維新の際に各地を布教して居つた時に「蓮の池」といふ舊藩地で、廢佛毀釋の時代であつた爲にその藩の士族たちが說教を妨害すべく、御正忌の大逮夜の時、高座の下でほし鰯を燒いた。そこでその惡臭は本堂内に滿ち滿ちた。而して說教の一句一句を批評するのであつた。その時父は、所謂和顏愛語の態度に安んじ、内に當年の板敷山を思ひ、枕石褥雪の在世を偲びて、涙と共に法を說いたのであつた。かの亂暴な士たちも遂に懺悔したこの事である。

あゝ和顏愛語の力、何ぞそれかくの如く强きや、忍辱忍從の輝き、何ぞかくの如く廣きや、吾等は深くこの點に留意せねばならぬと思ふのである。

五、結論

之を要するに說教が如何ほど巧みなりとも聽き手卽ち聽衆がないとするならば、そこには說教といふものはないことになる。もと〳〵能化の說教は結局所化の衆生を化益するためのものなるがためにこの所化の衆生卽ち聽衆が尤も大切なものである事はいふまでもないことである。

故に我等說教者は常にこの聽衆を尊重し尊敬して決して之を輕蔑し又はこの聽衆に對して無責任な考へや憎惡嫌忌の念を起してはならぬのである。然りと雖も又そこに阿諛諂佞、卽ち阿諛

ふことがあつては、又それが結局法を穢し聽衆を毒することになるのである。

故に一度高座に座す時講壇に立つ時、どうしても信を得せしめばや、救はゞやといふ佛如來の大悲觀に住し、過去を宿世の因緣あらばこそ、之だけの聽衆がこの私の說敎を聞いて吳れるのであり、さうしてこの聽衆の全體はみな如來最愛の子供であり、又我等と共に往生すべき兄弟であるといふこの因緣觀に立つとき、所對の機卽ち聽衆と布敎する我等との間には更に紙一枚をも入る、餘地がないことになるのである。

第四、實例

——實際上の事に就て——

これより實例についての說明を試んとするものであるが、今は說敎の例をあげる事にするので、講演は之に類例して考へて貰ひたいのである。

一、音聲の使用法

第一に聲の使ひ方について言へば、先づ講題は、中音にして底力のある聲を適當とする。尤も非常な群參時に於て靜寂を惹き起すためには特に低音を可とする事もあるのである。要するに本堂

と聽衆とに相應するやうに引き出すのである。而して講題は決して高低や節をつける事なく、眞つ直ぐにゆるやかに棒の如く引く事を以て最もよい方法とするのである。もし出來得るならば乙の聲を用ひ、只その最後だけを長く自然にひき、之を抑へるのである。尤もその聲の高低は結極聽衆の心理を統一するに止まるのであるが故に、その考を以てその場合に應ずるのである。次に正宗の話にうつれば、次第に聲を高めてその最高潮に達した時には全部の音聲を集注して話すべきであるが、最初より自分の音量、その他を度外視して音聲を發する事は深く之を慎しまねばならぬと共に、又高座上にあつて感情を烈しく激したり、腹を立てたりして最高の音聲を發するが如き事があれば、その場限りにすつかり聲が嗄れる場合がある。故に如何なる事があつても腹をたてるといふ事があつてはならぬ。

又所謂大押小押は力强く之を押し、又キリは極めてはつきりするのである。而して愉快な話は極めて愉快に、悲しい話は哀調を帶たる聲を使ひ、而して嚴肅な時には言葉も之に應じて嚴肅な言葉を使はねばならぬ、よく言ふ如く「刀振り上げ！スバリーと眞つ二ツ」、「槍をしごいてブスッッ！」といふが如きはその一例である。

二、因縁を話すに就ての注意

次に因縁を語るについて、已に故人となつた人の話はその姓名住所といふやうなものは出來得る限り的確に言ふ可きである。尤も惡人の引例の如きは特別なものであるから、近代のものは「ある所にある人が」と云ふ位にして置くべきである。また現に生きてゐる人の實例は努めてその姓名や住所は言はぬ方がよいと思ふ。之について私は折節種々な批評をうけて「それは定めて創作即ちつくり話であるから、姓名住所が言はれぬのであらう」と言はれる事があるが、私の主義では、この生きてゐる人の姓名や住所を明かに說いた場合に、その人が後に至つて、或は全く宗教から離れたり、又はその人の操行上に宗教的ならざる事が起つた場合に、取り返しのつかぬことになることが世間に多々あるのであるから、所謂「棺を蓋ふて事定まる」であつて生きてゐる間は、例へばその一時の出來事が實に立派で、それは世の模範となり、勿論布教の材料となるべき資格があつても、それを引例にひく場合は姓名住所は、ある人、ある所と言ふ位にしておく方が穩當であり且弊害が少いと思ふてゐるのである。

三、憂婆塞戒經の十六則

次に參考として、優婆塞戒經に擧げてある所の說教者の十六則を擧ぐる事とする。

一、時說、これは時をうるといふ事で、その第一席に於て凡てを說いてみて、さうしてその地方の對機の心持を診療する說き方である。故に第一席は極めて大切な事である事を云ふのである。尤も之は二日か三日か續いて說く場合の時の事である。

二、至心說、是は不淨說法をせざる事である。

三、次第說、是は木に竹をつがないやうに次第をおうて說くのである。

四、和合說、聽衆の心理とよく和合することで、說き手と聞き手とが一致するやうに說くのである。

五、隨喜說、これは自分が先づ法に隨喜して、ほんとうによろこび〳〵語る事である。

六、喜樂說、聽衆がよろこび樂しむやうに說く事である。

七、隨意說、是は一流の安心を說く事である。

八、不輕衆說、是は聽衆を輕蔑せずに聽衆を尊敬して說く事である。

九、可呵衆說、是は叱る事である、この叱るといふ事は非常に大切な事で、先づ叱らねばなら

ぬ場合にもよく法に歸依してゐる人卽ち同行を叱るべきであつて、寺に馴れざる所の聽衆を叱る事はよくない事である。

十、如法說、是は法の如く說く事で、所謂法螺をふいたり、チャリ談を試みるが如きものでないのである。

十一、自他利說、卽ち自信敎人信で、私も信じ人にも敎へ說き聞かしむる說き方である。

十二、不散亂說、是は散亂心を以て語らぬ事で、先づ自分の心を統一して語る事である、故に說敎前なごには必ず自分の精神を統一せねばならぬのであるから、酒を飲んで高座に上るが如きは非常に注意せねばならぬのである。

十三、合義說、これはその敎理敎義のまゝを說く事で、自分の自我を加へぬ事である、つまりあまり破邪をせぬ事で、破邪をしてゐるこ、不知不覺ゆきすぎるために、果からず邪義に陷る事があるので、最も注意すべきである。

十四、眞正說、是は正直に談ずる事である。

十五、說己不生憍慢、是は說き終つて憍慢を生ぜざる事で、說敎後に慢心を起さぬ事である。

十六、說己不求來世報、說き終つて來世の報を求めざる事で、卽ち是は自力の事で、先づ淨土眞宗にはない事であるが、ごうかするこ自分は信仰はないけれごも、これだけ人に說き聞かしてゐるので惡い處にゆくまいこいふ妄見を起すものであるが、それよりも先づ自ら眞の信仰を獲得せねばならぬのである。

以上の十六則は私の常に感佩してゐるこころのものである。

四、說敎の中心卽ち熱を何處に置くかといふ問題

私の主張するこころは自然にあるのであるからこゝに主力的熱をおかねばならぬこいふ樣な形式的なものはないので、つまり自分もその說敎こ一致して先づ自己自身が說敎の組織論理話材中のものこなつて次第に其の話が進んでゐる間に聽衆こ必ず一致して來るのである。こゝに自然の熱が湧いて來る。この熱力は殊更な威赫的のものでもなく又殊更にチャームせんための表面的な熱でもなく說敎こ自己こ聽衆こ所謂人こ法こ機こが三者一致されたこころの最高潮に達した時である。この時が所謂鞍上に人なく鞍下に馬なしこいふ境地であるのであつて、それが說敎の主力的熱である。之を自然こいふのである。然しながらこゝに所謂說敎の組織的法規こでもいふべ

きその一席の首尾が豫め整へられてない時は所謂脱線する場合が多いのである。

五、引例の扱ひ方

之はその前程としてよく正宗分的な所謂論理即ち法が詳しく巧に說かれてあるならばその引例を話し終つても別に合法の必要はない。これは既にその前程の說明が詳しいためその引例を引けば聽衆の方が之を合法して行くからの事である。若又前程の正宗分を詳しく說かれてない場合はその引例の上に一つ〳〵合法してゆくのである。こゝに尤も注意せねばならぬ事は、その引例の合法が餘りくどくどしくなつて重複すれば所謂蛇足を生じて聽衆をして欠伸の連發をなさしむるものである。

さりながら餘り簡潔すぎれば、聽衆は啞然として何の事やらさつぱり分らぬことになる。これは實に說教としては忌むべきことであつて、何れにしても中庸といふことを忘れてはならぬ。出すぎても惡く出ないではなほ惡い、この邊全く練習と注意と熟練とを要することである。

六、說教の妙所

說教の妙所即ち說き手と語り手とが能所一致して、壇上人なく壇下人なく、天地一枚と云ふ最

高調の風味が出てくるのは、即ち「自己の沒却」から發するのである。

世の講演演說には斷じて自己の沒却を許さぬものがある。それは自己の思想を傳達するか又は自己主張の達成にあるからである、今我々の云ふ所の說教は、只如來の御代官をつとむるのみであつて、若し自己と云ふならばそれは只如來の大悲と一致したる自己であつて、そこには「己を忘れたる自己」より外にはないのである、こゝに至れば古今名人と云はれた講談師とか講釋師たとへば近代に於ける三遊亭圓朝の如きも同じであつて、その人情話に現はれて來るその各〳〵の人物の性格即ち心持になつて話すから、そこには圓朝と云ふ個性はないのである。越路太夫の淨瑠璃でもやはり同じ事で、所謂「腹を語る」といふのがその各人物の腹になつて語るのである。

說教はその點に於て、一面からよく似て居るのである、兎に角、論理的に說くときも、感情的に說くときでも、そこには自己を超越した信仰の力が迸るのであるから、所謂力の雄辯であつても智の雄辯であつても又美の雄辯であつても何れもの上に一種の靈感が躍動して來るのである。

七、實例

無我の信仰

——眞俗相依說教第二十三——

讃題

これによりてなにごころをもつち、またなにと阿彌陀ほとけをたのみまゐらせて、ほとけになるべきぞなれば、なにのやうもいらず、たゞふたごゝろなく、一向に、阿彌陀佛ばかりをたのみまゐらせて、後生たすけたまへとおもふこゝろひとつにて、やすくほとけになるべきなり。

（蓮如上人御文章五帖目第七通）

（序辯）

此節は、久方振りに、皆さまとお話さして頂くことであります。いつも他行勝な私が、今年六月は、亡母の三回忌、尙今月は子供の一週忌、彼是にて此の夏は、依賴の說敎講演のすべてを斷つて、謹愼してみたいと思ひまして、八月中旬出發、北海道を巡回するまでは、皆樣のお側に居て、お話が出來る事と思ひます。よつて今日から三日間、世に云ふ農繁後の法會、卽ち夏の御座を勸めまして、出來得る限り順序を追うて、お話をさして頂き度いと思ひます。（以上序卽ち挨拶）

（正宗）

我が淨土眞宗、御開山聖人の宗敎は、信ずるといふ事が根本の肝要であります。櫻の花には色、梅の花には香と、それ〴〵特長があつて、他と相違したる點があります。禪宗は坐禪觀念を特長とし、眞言には三密の加持を以て、その宗の根本とするが如く、何れの宗旨、宗派にも、各々その特長がありまして、我が眞宗では、信心爲本卽ち信ずるといふ事が、その根本であります。（總じて一宗の根本を示す）

扨てこの信心の體は、南無阿彌陀佛の六字であつて、南無の二文字を歸命と釋し、その歸命が信心の事で、歸命といふことを、助け給へとタノムと御講釋なされて、「歸命とは後生助けたまへと、たのみ申すこゝろなり」と仰せられてあります。その助け給へとたのむとは、任せることで、あてにし、たよりにし、力にすることでありまして、どうぞ助けて下され——と願ふことではありません。

（信と請求の願との相違を示す）

全體、この頼むといふことを、願ふといふ事に取扱ふ場合もありますが、我が眞宗では、大慈大悲の彼尊樣を、あてにし、たよりにし、たのみにするといふ意味合ひでありまして、卽ち、お向ふ樣の力が私の力となり、頼みとなつて下さる事であります。（重れて信ずるの意味を明かにす）

（警　喩）

目はかすみ、足の萎ねたよろ〳〵の婆さんが、伊勢參宮から京參りまでして來たといふ、それは若い元氣な時か、四五年も前の事かと思へば、一昨日戻つて來たとのこと、そんなよろ〳〵した者が、どうして京參りをしたか、お前一人で參つたのか、と問へば

ハイ、親切な孫が、連れて參つて呉れました。汽車に乘る時は、切符も買うて乘せて呉れますし、關門の連絡船の乘り降りも、まるで孫が私を抱いてかゝへる樣にして、乘せたり降したり、京都に着いても、伊勢に參つても、俥やら電車やら、夜

は宿屋の内までも、それは〳〵、到れり盡せりの世話をやいて呉れた御蔭があればこそ、この樣な老耄の私が、お金も持たず、文字も知らず、方角すらも分らぬまゝ、誠にはや樂々と、參詣さして頂きました。（創作）

（合　法）

私に力はないけれど、向ふ樣の御力が、そのまゝ私の力となつた味ひがこれである。婆に行くべき力はないけれども連れて行つたは孫の力、さあこゝぢやぞよ……

……自分の胸に、聞こゑて解つて得心して、これでよいぞと力むぢやない、大慈大悲の親樣が、西岸上に立ち上り、手を上げては招き、口を開いては呼ぶ、

そのまゝ來いよ——必らず救ふ——、

仰せ一つが聞ゑるなり、無善造惡の私も、他をながむるの世話いらず、右を見るにも及ばない。（第一合法）

（以下重れて合法）

まことに死せんときは、かねてたのみおきつる妻子も財寶も、わが身には、ひとつも、あひそふことあるべからず、されば、死出の山路のすゑ、三途の大河をば、たゞひとりこそ、ゆきなんずれ。

一生涯のその間、骨折つては働き、働いては辛抱し、ためたお金も、積んだ寶も何もかも、たよりに思ひ力にした、女房も子供も兄弟も、野邊の煙を見るまでゝ……

……それから後は、

たゞ一人こそゆきなんずれ、

たつた獨りぢや、連はない……それなら何といたしませうと、案じ煩ふその處へ……天にも地にもたゞ一人、三世に一佛、恒沙に一體、拜む大悲の親樣が、

親ぢやそよ〳〵、案ずるな……落ちる地獄は閉ぢふさぎ、淨土の門を押し開き、待つて焦れて待ちかねて、待ちたる親がこゝに居るぞよ……そなたひとりをどうしても、助けたかつたばッかりに、五劫永劫命かけ、成就仕上げた南無阿

彌陀佛……。

參る謂れはなけれども、行くべき力はないけれど、大願業力の親樣が、落さんぞよの御親切、參らすぞよの御情、……親なればこそ〳〵——（抑揚體を終る）

と喜ぶ外はないのが、これが賴む味ひであります。（第二合法）

（因　緣）——此の因緣は御法義の因緣なるが故に別に合法はいらぬのである——

そこで信ずるとは、自分の手元に用事がなくなつて、彼尊の御手元の明らかに拜まれたのが信ずる相で、これが己を忘れた無我の信仰。（因緣序說）

（以下正しく因緣）

願行院和上の處へ、あのお園同行が、お伺ひ致しますと、

お園さん、よう來なさつたな……近頃久しぶりぢやつたな、喜ばれるかな……和上樣、どうして〳〵喜びが出て參りませう。極道者のこの婆で……お恥しう御座います。（以上談話體）

（以下口調體）

皆さん、喜ばん婆ぢやと云ふではないぞ、高野豆腐の樣に味も何もない奴ぢやと思はッしやるな、兩手をついて相濟みませんと謝るお園婆さんと、私は信心いたゞいてゐると、天狗のやうに鼻高々と、高振る自慢の同行と、どちらが有難いか。どちらが尊いか、サアー御當流の信仰の味ひは此處ぢやぞ……（以上口調體）

（以下談話體）

そこで和上

そんなら出かける後生は何とする。

その下からお園さん

ハイ、落ちまする……南無阿彌陀佛（以上談話體）

（以下、口調體又は朗咏體）

ハイ落ちまする、南無阿彌陀佛〈……、何といふ甘い味ひであらうか。落ちますと云ふ下から、騒ぐでない、案ずるでない、恐るゝのでもない、歎くのでもない、落着き拂つてどつしりと、聲も美はしいお念佛、其處が「機を叩けば法あり、法を叩けば機あり」ぢや、落つるとなつたその下には、落さんぞよの御慈悲の力、金剛堅固とあるからには、落つると云つてにつこりと、歡び笑ふて南無阿彌陀佛。（以上口調體又は朗咏體）

おつる機のそのしたじきは阿彌陀樣

おとさぬぞよの御手の上とは（以上朗咏體）

（以下口調體）

どうぞおあがり下されと、出されたお茶は、必らずお盆の臺の上、落ちるとなつた機の下には、落しはせんぞ、心配するな、のお盆がついて居るぞよ…（以上口調體）

（以下談話體）

乃で又、

和上、そんならお前はどうするか。

お園、落ちる機があつたらこそ、落さぬ彼尊が居つて下されます。

和上、愈々心配はないか。

お園、落ちる私に心配は御座いません。落さん御慈悲が大丈夫で御座いますもの

和上、お前の領解は立派ぢやのう。

お園、ハイ、和上様から譽められて、參るお淨土ぢやございません。例へ和上様から誘られても、突き放されても、御見捨ないのが親様で御座います。

（以上談話體）

（以下抑揚體）

何と尊い領解ぢやないか、變るは私の心ぢやが、變らぬ親の眞實心、天が地となり、地が天とならう例しはあらうとも、我が往生に間違ひないと、彼尊一人が力になり、親なればこそ〳〵、……（抑揚體を終る）と、御恩の程が仰がれるこそ、御當流の「助け給へとたのむ」の御味ひであります。

（餘波）

殘る御話は、明日に讓ります、何ふか後生を大事に思ひ、引き續いて御參詣の程を願ふ次第であります。（終）

結論

一、天才的布教家とその末路

天才必ずしも上達するものではない、却て天才はその才能にうぬぼれて不成功に終る事が多い。布教は學問と信仰と辯舌と音聲と才氣との上に、尙ほ練習を要するのであるから、只天才だけではいかぬのである。就中最も必要なのは幾度も述べた如く練習、努力である。所謂鍛練である。打つて〳〵打つた處に名刀が出來、練つて〳〵練つた所に良い絹がとれるやうに、殊に音聲の如きは天性の上に所謂練習をする時、そこに何ともいへぬ風味ある音聲が出てくるのであるから、何れにしても努力が最後の勝利を占むるのである。前に擧げた所の布教大家、江田常照師の如きは實に堅忍不拔の大努力家であつて、むしろその辯舌などは達辯と云ふ程の人ではなかつたのであるが、その苦心努力の結果があの大家を作りあげたのであると思ふ。又嘗て私の學舍に居たもので、今では相當に布教界に雄飛してゐる某君の如きは、當初私は到底ものになる見込はないと思つてゐたが、その君の努力と苦心とは當初のドモリで、然も天性の惡聲であつたにも拘はらず、今では既に達辯雄辯と言ふてもよく、そのドラ聲のまゝが一種の云ふ可からざる風韻のある

聲と化するに至つた事は只驚くの外はないのであるが、實に布教の上にとつてはその信仰の上にもたらされた努力苦心とが唯一の良手段である事を重ねて絶叫しておくのである。

二、賣談と實談

1、賣らん哉、說かん哉、味はん哉の說教

世の中に賣らん哉の說教がある。斯の如き說教は教材の展覽會であり、聽衆への賣付けものであつて、申さば店の主人の如き考へで、なるだけ多く賣る事を目的としてゐるのである。

次に說かん哉の說教も同じく只教理を說いて聽衆の前に誇らんとするが如きもので、しかしこれが萬機普益、善巧方便とかに誤魔化され易く、どうかすると持ちもしない種々な科學的知識を常識なぞゝ心得違ひして徒らに話の間口を廣くした結果、識者の笑を買ひ、法の威嚴を傷つくる事となるのである。そこでやはり餅屋は餅屋だといふ覺悟が一面からは實に重大なる必要事であるのである。

次に最後の味はん哉の說教こそ、始めて生命ある說教であつて是が卽ち眞實の說教卽ち大悲傳普化の報謝行としての說教であるのである。

2、賣談と實談との分岐點

前に述べた樣に、說教でも講演でも、布教者それ自己の信仰的人格の必然的發露であらねばならぬのであるから、こゝに自然に『賣談』と『實談』との二つのものの現れて來るのは當然過ぎる程の當然である。

故に自己の信仰的全人格をありのまゝに現し得たるものが『實談』であつて、只徒らに技巧をかひつくろひ、聽衆の歡心を買ふ事にのみ流れて、全然自己の何物も現れて居らぬ說教であつたならば、是れは全く自己に反逆し、如來の法を竊む處の盜賊であつて、實に賣談以上の賣談であるのである。

昭和二年十月に開かれた吾本願寺布教研究所に於て現龍谷大學學長勸學弓波瑞明和上一喝して云はく

『如來を信ぜずして、如來を說くものは『詐僞』なり』

と嗟、この一喝、其の聲鶴の如く、恐らく聞へざる處はないと信ずるものである。

3、布教使の心理

然れば「實談とは何ぞや」と云ふ問題を今一歩踏み込んで考察して見ねばならぬのであるが、若實談が自己の信仰的全人格の發露としたならば、信仰なき者は全く說教すべからずと云ふ事になるのである、そこで問題が紛糾して來る、故に布教使の心理を今一つ考察して見なければならぬのである、布教使と云ふ言葉が果して穩當であるか否かは別問題として、尠くとも私自身が布教使として私自身を内省する時、私には何ふしても懺悔せねば居られぬ一の大きなものがある、それは『自讃毀他』と云ふことである、自讃毀他とは申す迄もなく自分の事を讃めて、他人の事を惡く言ふことであつて、言ひ換れば自分の上には「自慢」がしたくて自稱日本一がきめこみたく、隨つて自分より優れた相手卽ち評判のよい他の布教使に對しては「强い烈しい嫉妬」が止まぬことである。

4、自慢心と嫉妬心

由來自慢心や我慢心は人間の本能であつて、これが善用される時に競爭心となり向上心となるのであるが、若しそれ之が惡用された時には、實に恐る可き、排他的嫉妬心となるのである。而して、この我慢心が擴張されて遂に嫉妬心となつた時は、そこに自讃毀他が行はれて來る、こ

の自讃毀他が行はれて來た時、所謂「職敵」と云ふりんき深き嫁が夫を嫉妬する樣に他の布教使に對して、何とか批評を試みて見たく惡口がしたくてならぬ、その結果が、布教使間の和合が破れ尤も醜き内輪喧嘩を惹起すのである。かうして尤も陋醜な俗惡な場面を信徒と民衆との前にさらけ出して、こゝに宗祖を傷け、宗門を毒するのである、古からこの樣な嫉妬心の强い布教者は、大抵、その妻君に伺ふてもやはり嫉妬の深いものでこの種の說教家の家庭には常に夫婦喧嘩が絶えぬ者であると云はれてあるが、これは餘り穿ち過ぎた話と思はるゝけれども一面大いに頂門の一針として味ふ可きことであると思ふ。

5、自讃毀他、我慢勝他の人は向上せず

自讃毀他と我慢勝他との二つが、恐る可き嫉妬を生み出すことは、前に申した通りで、個樣な考へからして、縱令或る善事が行はれたとしても、それは所謂『忌猜の善』である、この忌猜の善とは、他人の善事を忌み猜みてそれに對して自分も善事を爲すことであつて卽ち隨喜善の反對である、この忌猜の善は、修羅道の原因だと如來は示し給ふて居られる。

修羅道であれば、人間よりの墮落である、既に墮落の結果を引き起す原因であれば、たとひそ

れが原因であつてもこの原因を作りつゝあるものに向上の香すらもあらふ筈はないのである、故にこの嫉妬心の強い者に向上する理由がない、古來我慢と嫉妬とを以て、成功し大成した實例がないのは當然であらねばならぬ。

6、無感銘の說教

如上の如き卑劣な心からして、自分自身を高張し、尤らしき道心顏して、我ならでは如來の法を傳へ得るものなし等の、憍慢の風情をふりかざしたならば、假令懸河の辯も、錦繡の名句も、その私行を知りその人格を知つた人の前には、只その如何に「僞り欺くに巧なるか」を思はしむるに過ぎずして、而して一般の聽衆には「それが只一時の感興を呼ぶに留まり、宗教的浪花節信仰的講談たるのみで五十錢一圓の木戸錢を一錢二錢乃至文なしで數時間の娛樂を買ふた」と言ふに終り、決して何等の印象をも感銘をも與へぬもので「骨折り損のくたびれ儲け」であるのみならず、實にかくして大法の威信を傷け、自滅の淵に近づくのみである。

7、猛省一番を要す

私は私の自身の上に、この自讃毀他、我慢勝他、嫉妬、排他の凡てが、如何に私を墮落

せしめんとしたかを思ふ時實に慄然として肌に粟を生ずるのである。

而して私が嫉妬排他を行ふた時の心理狀態は實に「寂しいものであつて、自分自身は、その相手に到底及ぶ可からざるを知つて居るが故に、徒らに虛勢を張るのみで、例へば、弱ひ犬が猛き犬に遠吠へをすると同じ心持ちである、これに氣付て飜然として自分の非を悔ひ改める時初めて涙ぐましい懺悔が起つて來る、これを、勇ましい心と言はふか、清き心と言ほふか、眞劍な心と言ほふか、兎に角、自分先づ自ら勝利の聲を擧げずには居られなくなつて來るのである。

8、此の心を持つて講壇に立て

懺悔は淸淨の白衣である、我等はこの勇ましき懺悔を以て高座に登らねばならぬ、講壇に立たねばならぬ。

若し私にこの嫉妬心が起つたとしたならば、私は潔く對內的に懺悔し、場合に依つては對外的に發露懺悔すべきである、懺悔は信仰の唯一生命である、こゝに生命ある說敎が現はれて來るのである、生命ある說敎は、修辭がまづくても、辯舌が御粗末であつても、兎に角、生きて居る、作り花は何程奇麗でも、何處までも死に花である、虫に喰はれて花辨が缺けて居つても、

勢ひよく開きかけんとして居る生きた花には、生氣があり云ふ可からざる力があると同じ樣に、懺悔の生命を持つて居る說敎は、實に生きた說敎である、生きた說敎には血が流れて居り、脈が高くうつて居る、この生きた說敎でなくては、生きた人を救ふことは出來ない、現代は、正しくこの生きた說敎を要求して居るのである。

9、昔の說敎と今の說敎

昔の說敎は、型の如く說き去る說敎を上品なものとし、頓智のきいた話を名談として居つた傾きがあつた、型の如く說く說敎は飽きが來ない、頓智な說敎は大變に面白く肩が凝らぬ、けれどもそこには、全く宗敎味をはぎ取られた、單なる一種の藝術品が殘されてあるのみである、然しこれも精練され大成された所謂說敎であればそこにいくらか、聽衆の魅了し去る處に藝術的價値があるが、一歩下つた極めて模倣的な愚劣な說敎に至つては一種の野鄙な俗謠姪歌と同樣であつて實に有害無益なものである。

今の說敎卽ち私の謂ふ處の現代が眞實に要求して居る說敎は、斯の如きものであつてはならぬ、又斯の如きものではない、卽ち眞實の生命の火の燃へて居る自己體驗の發露懺悔が大衆壇上

に運び出されたものであらねばならぬのである。

10、生命ある說敎

懺悔の生命ある說敎ならば、何時でも何處でも、切々として聽衆に迫つて行く、卽ち聽衆の心肝を抉つて行く、徹底せずば止まぬ、否徹底せずば止まぬの心すら忘れて我もなく他もなし、說聽一如の妙境が現はれて來るのである、是が生命ある說敎であると思ふ、昭和二年十月下旬に總會所に示談をされた大沼善隆和上の法筵に參して席每に泣き座每に感じ、話が終つた後も恍惚として餘音嫋々の內に忘る能はざるものがあり、是を思ひ出す度に法悅の泉に浸るの思ひがするのであるが、斯の如きはたしかに生きた說敎であると思ふのである。

11、青木勝道君の生きた說敎

青木勝道君は既に故人である、青木君は元俗士より出た人で道念の篤人いであつた、やはり私の洗心學舍の同人であつたが、同君が或る寺で

『先生、私は、今日は或る事で先生に向ふて反抗したい心が起りまして、後から考へると全く自分の間違ひと云ふことが分りましたので實に自分ながら、淺間敷くて恐ろしくて恥かしくて立

ても座つても居られません、私は自分の淺間しさが餘りに醜いので僧侶を止めよふかと思ひます』

と卒直に一切を懺悔した、そこで

『君、實にありがたい、實に尊い、その懺悔が眞實であり生命である、そのまゝの告白と發表とが、それが眞實の說敎であり、僞らざる說敎である』

と語つた、その日靑木君は、高座でそのまゝの懺悔を述べた、この時滿堂六七百の聽衆寂として聲なく實に水を打つた樣に、約四十分の說敎は、咄嗟の雄辯、宛然洪河の決する慨があつた、嗚咽の念佛は堂の四隅に湧き、歔欷流涕の聲は滿堂を靈化して仕舞ふた、この結果、多くの懺悔者を出し今尙ほ靑木君の德を頌へて居る人が殘つて居るのである。

兎に角生きた說敎は、眞實の懺悔を持つ處の信仰より流れ出づるものであることを忘れてはならぬ。

餘論

醫學博士諸岡存氏の講談論

精神病理學界の泰斗諸岡存博士が嘗て次の樣な事を言つた事がある。

「過去の日本人敎化に見ても亦將來の敎化の上にも講談なるものが必要であつたこと又必要であることは、みのがすことの出來ぬ重要な事である。武士道の鼓吹や義理人情といふ樣な點に就ては、大久保彦左衛門、水戸黃門、仙台萩、義士銘々傳といふ樣なものの社會敎化に及ぼした影響は實に重大なもので、之は講談なるもの、通俗的で且つ大衆的であるためであつて、之を取り去ることの出來ざるのみか益盛んにせねばならぬと思ふ、我々の如き全く理智的なものでも講談ものには、いつとなしに、しつとりさせられて來る。朋友の某博士が講談を讀んでいつもほろ〳〵と泣いてゐるのを見て、あの冷い頭の中からこの温な涙を引出し得るものは全く講談の力であると感じたことがあつた」と。

思ふに、日本人の所謂義理人情といふものは、德川時代では講談に依つて養はれたことはいふ

迄もないことで、而してその義理人情の中心思想とも言はるべき因縁因果即ち因果觀面といふこと や勸善懲惡といふことや、神や佛の觀念、なほ一般的の尊敬觀念と云つた樣な一般民衆の宗教的情念は、之が全くその時代に於ける寺院教育即ち極めて平易通俗な勸化法談に依つて養はれたことは事實であるのである。

當時の大衆教化即ち一般的社會教化はかうして平易通俗な勸化法談即ち說教を筆頭として、講談、琵琶、祭文、淨瑠璃其の他諸曲芝居等に依つたのである。

故に之を今日より見れば一般大衆の最小限度の智識即ち小學校卒業の程度に宗教々育を通俗化し一般化してゆくことが、大衆的教化に於ける說教講演の第一要素であらねばならぬと思ふ。

新と舊

新と舊、新しと云ひ舊いと云ふて種々に批評して居るが、勿論教理信條の上には、新舊のあらふ筈はないので、只教材の新舊とか、又は說明の形式の上に於て新舊を云ふとすれば、これは所謂、談力の足らないものの云ふことで、其の談力のあるものにはあながち教材の新舊や說明形式の新舊を論ずる必要がないのみならず、その人の談ずる處、忽ち、一般の聽衆を引つけて、そこ

にそれがその時代に適應する所謂新しき材料新しき形式となるので、この邊から云へば、新しいとはつまり「生きて居る」と云ふことになるのである、故にたとひその材料が生きて居ても、談力のない人が之を扱へば、忽ち死んで仕舞ふのであり、鮮しい魚でも料理の下手なものが扱へば、食へない樣にして仕舞ふし、干物でも料理の名人の手に渡れば、生き者の樣に仕上て仕舞ふのである、況んや談力ある人の手に新らしき材料が取扱はるれば鬼に金棒であるのである。

珍らしい話

世には珍らしい話、人の云はぬ話が聞けるとて、布教界の一隅にもてはやされて居るものがあるが、これには二つの見方があつて、一には普通の話をしては聽衆を引付ける力がないから、珍らしき材料、珍らしい言方をし樣と考へたもので、これも談力が足らないのである、私は私の學舍の諸君へ「珍らしい話をして人を感心させるよりも、當り前の話をして、人が感心する樣に話もし努力もせねばならぬ、そこが信念と練習である」と申して居るのである。蓮如上人が『當流には、凡夫が佛になると云ふことより外に不思議はない』と仰せられたのと同じである。

二には珍らしい事、人の言はぬ事を云ふことは、何ふかすると、烈しい排他的の說教即

ち己の言ふこと丈が、ほんまであつて、世の多くの布教使は大抵ウソを言ふのであると言ふ風に說くか、左もなくば全く不思議の名言を使ふて、人をたぶらかすところの邪僞の說教であつて、これなれば、凡ての布教使の言はぬことであるから珍らしきことであるのである。

辯舌と使用語についての注意

辯舌や使用語については、その場合を考ふる事が必要であつて、下卑た言葉を用ゆるといふやうな事でもやはり場合を考へねばならぬ、甚だしからぬけびた言葉は田舍などでは非常に親しみ深い言葉としてうけ入れられる事が多い、殊にその地方語卽ち方言の如きは、その使方によつては說教の効果を非常に良好ならしむる場合がある。滑稽についてもやはり以上の如きもので、その場合を考うる事が必要であるのである。尤もこの滑稽については私の主義としては、滑稽を一ツの話材にとるといふ事は、あまりにとらざる所で、滑稽は極めて簡單にして言葉の使ひ加減や、又は極輕き態度の上に於て、はつとした場合に巧に聽衆をスツーと笑はせる位な程度に止めておく呼吸が最上のものであると思ふのである、けびた用語、野卑な言葉を使ふ事を大變に嫌ふ人があるけれども、これはその布教家の注意の足らざるためであつて、私は貴族階級に對す

る講演座談の折によく相當に思ひきつて、むしろ野卑に近い言葉を用うる事があるが、これが却つて輕い滑稽となり、又親しみの深い意味となる事も少なくないのである。尤も何れの場合にも斯の如き使用語を用ゆる習慣がある人は、その當初に於て十二分に是を斷つて置き、又同じく話の最後にも斷るやうにしなければならぬのである。

一歩主義

一歩主義、又は半歩主義と云はれる如く、指導者階級は時流に先立つこと、半歩乃至一歩を進むといふ事を生命とせねばならないのである。然らざればその時代人と親しみ、之を感化指導する事は出來ない。尤もその理想や見識は、殆ど豫言者の如く、千百年の將來に於かねばならぬ事は勿論であるけれども、その云ふ所、行ふ所は只一歩乃至半歩でなくては、更にその親しみがないのみならず、たとひその理想見識が正當なりとしても、二十年後の事を今直に行はふとしたならば、それは一種の狂人、又は奇矯な言論として社會に容れられないのである。

附言して置くが、親鸞聖人の肉食妻帶の如きは、或る一種の批評家が言ふが如く、非常にぬきんでたる事ではなくして、只その時代に半歩乃至一歩を先んぜられたに過ぎないといふ事が正し

い見方であると思ふ。

批評に對する布教家の態度

思ふに學問は或る場合には却て自我的な獨斷に遍して啻に自己を潔くし單なる自己滿足に陷り聽手が分らうが分るまいが、そんなことにはお構いなしと云ふ風になつて、更に對機的の考慮を拂ふ餘地を持たぬことが多いのであるが、そこになると說教は其の教理が徹底的の斷定であるから、此の斷定された教理を如何に聞かすべきやに努力する處からして却てその誘引調機の爲に常に對機說法を主とするが故に大衆の心理に相應せねばならぬと云ふ考へが深いのである、妥協でなくして相應であり、詔諛でなくして一致である。故に「吾れ獨り分れり」的の態度でなくして常に一般の氣分を考慮して行く處に、批判を超越して、その批判を受け容るの雅量がある。そこに說教の仕方が巧でなかつたので、かういふ批評を受けたと云ふ懺悔が起つて、決して憎惡の念はないのである。如何となれば法は如來の法であるから只此の法を宣傳する自分の注意練習の足りなかつた爲であるが故に益自己を修養して行かねばならぬと云ふ精神が奮い起つて來るのであるからである。

生花の家元である池の坊の何代目かの宗匠の歌として殘つて居る

『誰が見ても惡ふないのが好いのなり　己が好いので好いのではなし』

とはこの意味を道破して居ると思ふのである。

宗教的術語の使用問題

近頃、在來使用して來た所の宗教的術語が、一般社會人に分りにくいといふ所からして、布教家が殊更にこの術語を作りかへたり、又はその術語を忌み嫌ふといふ樣な傾きがある。之は一大考慮を拂はねばならぬ事と思ふのである。

思ふに社會の通用語が宗教化された時代は、宗教繁昌の時代であり、之と反對の場合は、宗教衰退の時であるのである。

近來政治界の通用語に、自力本願とか、他力本願とか云ふ言葉が用ひられてゐるが、勿論之が宗教意義とは非常な相違があるにもせよ、尙ほそれは民衆の頭に、佛教の概念が如何に植込まれてゐるかと云ふ事の一種の例證として、むしろ之を喜ぶべきであると思ふのである。

飜つて思へば、佛教の術語は、之が說明に難解なりとして、之を內部から改めやうとしてゐ

る時に、一方、難解苦澁な哲學や、醫學や、化學上の術語は、平氣に社會に使用され、又それを使用することを、如何にも之を名譽とし、之を識者ぶる傾きがある。こゝにも佛教の勢力が如何に縮められてゐるかといふ事が分るではないか。然れば宗教戰鬪の第一線に立つ所の吾々布教家は、この宗教的術語をうち込むこと、之が宗教宣傳の第一要素であり、尙ほ且つ入信の有力なる力添であるといふ事を考へ、所謂隨類應同と、方便引入とをもつて、出でゝは通俗的な言ひ方をもつてこれを說きつゝ、不知不識の間にその術語を受け入れしめねばならぬのである、蓋し出づるは入らしめんが爲であるが故に、自家專門の術語をすてゝ、全く通俗化し終るならば、出できつてしまつたのであつて、それは宗教の死であり、宗教の自殺である。故に出でよ〳〵、而して入らしめよ、大いに入らしめよと叫ばざるを得ないのである。由來、文字の宗教とまで云はれた吾々の宗門にとつては、殊に此の點の注意が必要であると思ふのである。印度語の經典が漢譯和譯されて之を聖典として、そこに傳統相承の美しさと嚴さとを保つて居るところの佛教に於ては、この專門語が若し現代化されたとしても、それが果して專門的術語の多含な意味をあらはし得るや否やが危ぶまれるのである。たとへば、捨家棄慾といふ事を、只家庭の繁雜から逃れて、佛道

を修業するといふ事にしてみても、果して經典の捨家棄慾といふ事の意味が徹底するや否や、卽ち棄恩入無爲の意味が徹底するや否や、ほんたうに妻子を捨て俗緣を斷ち、深山幽谷に修業するといふ意味が徹底するや否や、又「忍辱」を「忍耐」とし、「精進」を「勤勉」と改め、「布施」を「慈善」としてみても、佛典にあらはれてゐる「忍辱、精進、布施」といふ言葉の本質があらはれてゐるか否か、尙ほ又、例へば、「忍耐、勤勉、慈善」といふ言葉に於て、果して「忍辱、精進、布施」といふ本質が受け入れられるや否やゝゝゝゝ、斯の如く詮じ來れば、そのあらはれ方に於ても、又受け入れる概念の上に於ても、實に天地雲泥の相違があるのではなからうかと思ふのである。

思ふに之を世俗的に政策の上より見るも、英國やドイツが、その自國語を宣傳するが如き、又日本の植民地に於ける母國語教育の如きも、是全く一はその國の外的伸張の巧策であり、一は國民精神の注入である。

之を以て見るも、佛教の專門的術語を植え込むといふ事は、吾々布教家の大なる責任であり、又偉大なる使命であるのではなからうか。然るに若しそれ、布教家が自ら悲鳴を上げて、敵の軍

門に白旗を揭げ、術語の革命化を叫ぶが如きは、傳統三千年のそれをすてゝ、全く之を塵泥に拋つものであつて、實に痛嘆大息の限りではあるまいか、此の點は斷じて布教家各位に向つて、再考三思を願ふて止まないのである。

宗學の說教化

宗學と云へども、たゞこれ出離生死の爲であつて、之を置いて別に何の意味をも持たない、昔から「教導は學の用なり。」と申して、教導の活用を持たない學問であるならば、それは淨土眞宗に於ける宗學の死であらねばならぬ。故に何程研究がつまれても、それが若し布教壇上にうつされざるものとするならば、それは硬化したる學問で、こゝに教と學との衝突を起すのである。故に宗學は今少しく實際化され、布教化されねばならぬのである。此の學問の研究を實際化し、布教化せんが爲の使命を持つて生れたものゝ一つに布教研究所がある。故に布教研究所の使命の一つは、たしかに此の宗學の說教化をはかる事である。之についてはかつて弓波、雲山の二勸學や、杉教授その他の人々と大いに語つた事があるが、どうしても學即教の理想が實現された時にこそ、そこに始めて宗門の大進展が見られる事であると思ふのである。之も吾等布教家の最も

努力せねばならぬ點の一つであると思ふのである。

布教方針の一面觀

說教は讀んで字の如く、教を說くのである。說くことは、解剖する事である。骨は骨、肉は肉、皮は皮とそれ〴〵に切りほどいて、はつきりと分らせることである。されば說教の目的は、知らしめ、分らしめ、味はゝしむるにあるのである。故に徒らに六ケしい事や緻密な面倒くさい事を云ふものは說教ではないのである。只如何に平易に語るかと云ふ事を考究せねばならぬのである。殊に淨土眞宗は、易行易修の法門で、而も音聲說法をもつて、平易に說き平易に信ぜしむる事が主眼なるが故に、說教が、淨土眞宗に於て最も發達したのは、この理由にあるのではないかと思ふのである。之に就いて、龍谷大學の杉教授が、「二河譬の三家觀」の中に、次の樣な事を言はれてゐる。

「無論二河譬に言はんとする事柄は前後に書かれてあることでありますが、それを行者に易く知らせるため、卽ち信心の相狀をも易く示し、古今楷定の要旨をも易く知らす、易くといふ爲にこの譬喩は出て來たものであると思ひまして易くといふ字を兩方に用ひたのであります。こ

れは淨土教といたしましては、この易いといふ事はお互が忘れてはならぬ事であります、これは分り切つたことでありますけれども、注意しなければならぬ事でありまして、眞宗では宗祖の御著述以來、この易いといふ事は特色であつた。宗祖が如何に易く示さうかといふ事に苦心された事はその書きぶりでも、假名文字の間をあけられたことまでに見らるゝ。その精神を蓮如上人がお繼ぎになつて御文章が易く示されてあります。所が德川時代に學問が盛んになつて來て、學問に携はつてゐるものはともすれば屁むづかしい、何のことか分らぬやうな言葉を使ふやうになつて來まして、著述もあまり易く書くと輕蔑したやうな態度をとるものもあつたのでありますがこれは以ての外のことでありまして、易いといふことは淨土教といたしましては、彌陀の本願からさうでありまして、本願では勝易の二義が肝要のことでありますがとりわけ易いといふことは重要な事であります。淨影、嘉祥、天台等の學者を對手として論議するといふことも、むつかしい爭ひだけでは淨土教の本意が達せられないわけで、二河譬に於て易く示すといふことで淨土教の實際的方面を現はされてゐるのだと思ひまして、その意味で、易く信心の相狀を示し、易く楷定の要旨をあらはして居るものであると、設意を窺ふたのであります。」

然れば此の淨土眞宗の說教の仕振は、決して六ケ敷く說かず、如何にして平易に說くかと言ふ事に、苦心と努力とを要することを布敎の一方針と思ふのである。

社會問題を如何に取扱ふべきか

宗教の世界に二つあるとするならば、第一の世界は純信仰であり、第二の世界は社會問題である。之が眞俗二諦と言はれるのであつて、この二つを說く事が布敎の目的である。若し布敎の形式を講演と說教とに分けるならば、社會思想の問題は、多く之を講演に於てし、說教に於ては、可及的純安心としたいのである。さなきだに思想や學問の影響をうけて、ともすれば迎合的な說き方をして、中には、全く現實の救濟を佛とし生活的社會的に極樂を建設せよと說いたり、甚だしきは觀念の淨土や佛といふ樣な事すら云はれてきた時代なるが故に、私の考へとしては、むしろ今日の說教では、一機一緣的な、つまり微細な、申さば揚枝の先で重箱の隅をほじり出す樣な話よりも、大體的な輪劃的な淨土眞宗の法相、卽ち無常論とか、往生論とか云ふ點を力說して、純安心を說く必要があると思ふのである。曾ては相當に安心問題を詳說せし私は、近來往生淨土といふ事を說き度い樣な氣持がするのであつて、私の個人雜誌の聲も、全くこの一本調子を

その方針として來たのはこの理由である。

然しながら、單に第一世界の純安心を說くばかりでなく、勿論第二世界の俗諦教義、卽ち社會問題思想問題を語るべきは云ふ迄もない事であつて、先づ朝、晝、晩の三回に話すこするならば、朝は純安心、晝は淨土眞宗の輪劃、夜は俗諦卽ち思想問題、又は社會問題を說くこいふ風にしたいこ思ふのである。勿論、思想問題や社會問題は、どこまでも佛敎の原理をもつて之を批判し、公正な結論を聽衆に指示すべきは云ふまでもない事である。

社會事業と傳道

之は布敎政策の問題であるけれども、順序こして勢ひここに及んだのであるから簡單に之を取扱つてみたいこ思ふ。切り縮めて言へば、

一、傳道の方便こしての社會事業、

二、大悲心の顯現こしての社會事業、

第一の傳道の方便こしての社會事業は佛敎の第二義であつて而して布敎の政策であるが故にその仕方は極めて積極的であるのである。然しながら無論第二義の事であるが故に、所謂暫用還廢

のもので、社會指導の第一線に立てる宗敎家が、すべての社會事業の上に先鞭をつけて之を起したこしても、永く之に執着するの必要もなく、又他こ競爭するの必要はないのである。つまり時が來ればあつさりこ手を引いて之を他へゆづるべきである。それは國家や社會の施設が進步して來た時には、たゞ宗敎は慈善團體の一こして、僅かに認められるに過ぎない事こなつてくるからである。つまり國家的社會的施設の不備なる間丈が、宗敎家が社會事業をなすべき世界である。行基菩薩や弘法大師が道路を開鑿し、橋梁を架けたからこて、あながちに今日の僧侶が、線路工夫や道路工夫こなり、又橋かけ大工や土木人足であらねばならぬこいふ事はないのである。故に吾等宗敎家の社會事業は、その社會が目醒める迄の間の事であればそれでよいこ思ふのである。卽ち昔の寺小屋敎育が、今日の學校敎育にその全部を奪ひ取られたるが如きはその好適例である。故に斯の如きの社會事業は、社會がたしかに、宗敎家を認めて尊敬する爲に傳導の方便こなる事は勿論であるのである。

然しながら、第二の大悲の顯現こしての社會事業は、之は事業の仕ぶりから云へば、勿論消極的なものであるけれども、之はその宗敎の精神から、止むに止まれぬものこして現はれたものであ

つて、つまり之が大悲心の顯現である。例へば無料診療所の如き、養老院の如き、施療院の如き、其他の施設が他の社會的の施設とかけ離れて、超然として純宗教的の立場から企てるものであり、そこに又特種の意味をもつてゐるが故に、方法そのよろしきを得たならば、比較的長い生命を持つ事が出來ると思ふのである。而してそれが亦不知不識の間に傳導の助けとなつて行く事は云ふ迄もない事であるのである。

新舊思想過渡時代の布教法

思ふに、過去の布教は主として說教の上に之を見れば、宗乘的專門の文句教義の端に涉つて、研究的學問を模倣したる所の說教と、大衆的な所謂節說教の二つに分れてゐたのであるが、現在一部の趨勢としては、政治家が青年を相手とせよと叫び出した如く、布教も青年を相手とし、科學に準據して宗教を解き、社會的布教、生活卽ち宗教と云ふ樣な一點張りで行けといふ樣な說が、相當に頭を持上げてゐるのである。然しながら、在來の說教が劃然たるこの二大別を示しては居るものゝ、何れも萎靡として振はない所より見れば、是は社會より取り殘されたのであるか、又は社會を指導する力が旣に社會に後れたものであるか、又は社會指導の實力を失つたのであるか、

何れにしても此の三つを出づる事は出來ないのである。

然しながら、現代の一部の聲である青年を相手とせよといふ事は、かの政治家が、中年以上の民衆は、その批判力が種々なる試練をうけてゐるといふ所から之を避けて、皮肉に云へば、煽動し易く、又自己の手に入れて快よく之を使ふに利便の多い所からして「純眞なる青年よ」と叫びかけるが如き、腹黑さをもつて宗教家が青年を相手とせよと呼ぶのであつたとするならば、實に大きな誤謬と云はねばならぬのである。

第二に科學に準據して宗教を說けといふ事も、こもすれば自己の無學や辯難の困難なるが爲に、極端に云へば、科學に媚びるといふ事になり易いのであるから考慮しなければならぬ。

第三に、社會的布教の一點張りを叫ぶ裏にも、極めて卑劣な宣傳政策が含まれ、甚だしきに至つては、有識階級に媚び、爲政者にへつらふといふ事が含まれてゐるとするならば、それは實に唾棄すべき考へと云はねばならぬのである。

そも〳〵彌陀の本願は、十方衆生の救濟である。只有緣を度して、暫らくも休息せぬ事が、報恩的傳道の要諦であるが故に、無知識階級も、有識階級も、宗教の第一義から云へば、あながち之れ

を尊ぶ事も、之れを輕賤するといふ事もあるべきでない。故に有識者に對しても、爲政者に對しても、決して媚びる事なくして、堂々として道を說き、更に亦、無識階級、佛敎で云ふ所の鈍根の機に對しては、尙ほ之れを慈愛悲憐せねばならぬのである。佛の大悲は苦者に於てするといふ事が、やはりかういふ點にも云はれると思ふのである。思ふに有識階級、卽ち利根の者を敎化するの必要もあるが、社會の多數である鈍根、卽ち無識階級に至つては、その敎化はむしろ困難であつて、懇切丁寧、反復往來の慈辯でなくてはならぬのである。

要するに過渡時代に於ける今日の布敎家は、とにかく凡ての方法を常に中庸に置くといふ事が最も必要であつて、そこには、節說敎必ずしも捨つべきものにあらず、宗乘的の說敎あながちに笑ふべきにもあらず、靑年を相手とし、老人を相手とし、科學に準據し、生活を說き、信仰を力說し、行く處、至る所、足の屆く所、手のふるゝ所、所謂四面八臂の大手腕的布敎をなす事が肝要である。

布敎の將來

布敎の將來といふ事については、吾等は只眼前のそれに、一歩乃至半歩を進めて行けば事足る

のであるけれども、又之を考へる事も、無用の事ではないと思ふのである。例へば現在の大衆布敎で之を云へば、殆ど習慣視され、儀式視された高座上の布敎の生命も、決して一朝一夕に終るものではなく、この形式が續く時代も相當に長からうと思はるゝのである。その他、文書傳導の必要も盛んなるべく、映畫でも、トーキーでも、又ラジオでも、それが布敎化される事は益盛になつてくると思はれるが、然しそれでもやはり物足らぬものであつて、その人の前に立ち、その肉聲をきゝ、その人格に接する事は、宗敎感化の第一義であるから、眞劍に道を求むるものゝ要求が强く起つて來ると共に、制限せられたる聽衆、卽ち會員組織の敎會、家庭的傳導、個人傳導といふ樣な傾きが起つて來ると思はるゝのである。卽ち敎育の普及、並に思想の相違が、個人の性格又は家庭の組織に影響したる結果が、簡單にして少時間の間に、多量な收獲をうけ入れられる樣な方法におもむくといふ趨勢を持つてゐると思はるゝのである。されば在來の寺院布敎の方法も、更に又敎團意識としても、此の風潮に鑑みて、之を改良する必要がありはせぬかと思ふのである。

宗政家と宗學者と布敎家

宗政家は宗教行政の畫策者であり、宗學者は云ふ迄もなく宗乘の研究者である。例へば宗政家は陸軍の參謀部の如く、宗學者は兵站部の如く、而して布教家は、正しく戰線に立つ勇士である。故に常に討死を覺悟して居なければならぬ。而して又、その論功々賞の如きは、割合に少きを恨んではならぬ。そこには、「萬卒骨枯れて、一將功を爲す。」といふ昔からの言葉が應用される事を忘れてはならぬと共に、そこに又、布教家にこそ、最も高き犧牲的價値がある事を誇こせねばならぬのである。

然るに古來、この三者の調和が非常に困難なもので、宗政家は、宗學者、布教家を、「彼等は何の仕事も出來ぬお目出度いものである。」といひ、宗學者は、宗政家、布教家を、「何にも知らぬ愚者である。」とそしり、布教家は又、「宗政家や宗學者の如きは、實際には更に役立たない所の兜人形であり、書物虫である。」と惡口するのである。かくして三者各〳〵しのぎを削つて、只徒らに宗門の進軍を妨ぐるのみである。近時はこの風潮が、漸次に革新し來つた觀がないでもないが、尙ほ百歩千歩を進めて、三者鼎立益互に尊敬融和して、法門の隆盛に貢献せねばならぬと思ふのである。

寺院布教に就て

説教にしても講演にしてもその對機が限定せられた聽衆でなくて一般大衆とするならば、相當の群集を必要とするのである。この聽衆を集むる方法に於ては、その第一日の責任は正しくその住職にあるとしなければならぬ。故に住職なるものはその招くところの講師の經歷人格講演の内容等に就て極めて正確に又巧妙にポスター、又は宣傳ビラ、立看板、案内狀等に依つて、之を宣傳誘引することが必要である。故に三日間の會期とするならば第一日の聽衆數は會主の力であつて、二日以後の聽衆數は布教者の力とせねばならぬのである。

反對にその宣傳が誇張大に過ぎて、教界の明星來る、教界のルーテル來たるとか、又は布教界の横綱とか、甚だしきに至つては説教界の日下開山、説教學大博士、その他山鳥の尾のながく〳〵しき肩書つきや、尙ほ甚だしきは寫眞入り廣告等に依つて、或は滑稽化され、或は藝人化されて、かくしてその地方に於ける説教講演がその感化力を失墜し、引いて宗勢の衰頽を招いた地方も少くないのである。この點は宣傳上の大なる注意と思ふのである。

而して、その講演説教の最終日又は其の前日に於てその布教者の講演説教及び會場の設備其の

他について聽衆の感銘の程度又は批判等を一般聽衆に求める方法を採ることなど、(例へば鉛筆こ紙こを全聽衆に廻して之を書かしむなど)は凡ての參考として尤も必要なことであると思ふ。

(終)

昭和四年十二月十五日 印刷納本
昭和四年十二月二十日 發行

「布教の理論と其の實際」 奥付 定價金五拾錢(送料四錢)

不許複製

著者 佐賀縣三養基郡基山村 調龍叙

檢印

著者 調龍叙

發行者 京都府紀伊郡深草町稲荷一ノ坪十四 鳳龍

印刷者 京都市下京區醒ケ井通魚棚上ル佐女牛井町 小林庄太郎

發行所 京都市外深草町福稲一ノ坪十四 聲社
(振替口座大阪三一八〇二番)

調龍叡著

眞俗相依說教

第二版出來
定價 金壹圓五拾錢
送料 拾錢

本書一度世に出るや白熱的好評を以て忽ち賣切となり久敷く品切の處茲に幾多の訂正なつて第二版出づ

目次

浄土眞宗　七講
名義相應の本願　二講
明如上人の御功績　一講
絶對他力の信仰　一講
念佛爲本と信心爲本　一講
親子の自覺と信仰味　一講
自己反省の榮光　一講
世相無常と往生淨土　一講
信仰の活現　一講
祈禱と絶對の信仰　一講
眞實の救濟　一講
徹底の慈悲　一講
追憶の涙と其の恩寵　一講
無上の大信　一講
諒闇の與へし嚴戒　一講
無我の信仰　三講

調龍叡著（パンフレット第二輯）

病牀に輝く法悅

上製壹圓
並製七拾錢
送料四錢

肉體の弱者として、生への展開にあらゆる苦闘を續ける者の爲めの後援者は誰ぞ、支持者は誰ぞ、陰慘な病牀に光なき身を喞ち、黑闇々たる未來の行くてに戰く者への光明は何か、慰安は何か、これがこの著書の依て成りたる所以である。されば本書は病者の慰安であり力であり、而して又一面法味愛樂の好伴侶である。

目次

第一 緒言
一、病人の心理
二、病と生命
三、癒る病と癒らぬ病
四、不安を一掃せよ
五、弱點一掃の徹底策
第二 養病篇
一、絶對に醫師を信賴せよ
二、病と迷信
三、迷信には確固たる根底なし
四、迷信は疑を本とす
五、愚者の話
六、迷信の最後的悲哀
第三 自覺篇
一、病を恐るゝの不利益
二、病の佛教的考察
三、人間の實相
四、病に對する執着
五、人世は夢
六、運命への安住
七、誓了院の運命觀
八、執着を離る、處に醫師を信賴す
九、病を恐るゝところの根本原因
十、死苦
十一、愛別離苦
十二、未來の暗黑—地獄—極樂—如來
十三、不安の除去
第四 信仰篇
一、死に直面して
二、病を業報と感じたる人
三、死に安じたる人
四、死を樂むの人
五、凡てを感謝して死を迎へたる人
六、凡てを如來の方便として受入れたる人
七、御親の如來と罪の子としての私
第五 結尾

發行所　京都市外深草町　振替大阪三一八〇二番　聲社

調龍叡著（パンフレット第壹輯）

時弊救濟の要道と佛教

定價一部金參拾錢
郵稅金貳錢

内容梗概

一、御大典を迎へて
—千載一遇の盛儀—至孝の御聖德—朝見の御勅語に現はれたる御孝道—忠孝一致—國民同祖情合的忠義

二、現下の種々相
(イ)政治界の紛爭（政治界の腐敗—只利を言ふのみ—政黨的内亂）
(ロ)共產黨の出現（共產黨の檢擧—インターナショナルの歷史—第三インターナショナルの根本主義—レーニン曰く—愛と親疏—國體の愛護）
(ハ)暴力團の流行
(ニ)直訴狂の類出
(ホ)國民精神の健康增進
（毒菌の征服—永久蠱生—信仰の缺乏—精神的健康增進の要諦）

三、佛敎徒の覺悟
(イ)佛敎より觀たる國體（腐敗は毒菌養生の素地—傳統相承—傳統相承の信仰法脈血脈の相承—信仰的國體）
(ロ)二諦相資の宗風（淨土眞宗の眞俗二諦—家庭道德國家道德社會道德—二諦の相資相依—信仰と人道との相資—令法久住利樂有情）
(ハ)感恩の生活（思想と思想—思想の彈壓—思想と智識と環境—君臣の因緣—至誠の發露）

發行所　京都市外深草町一ノ一坪一四　振替大阪三一八〇二番　聲社

調龍叡著

佛敎より觀たる小作問題

四六版洋本函入
定價金壹圓五拾錢

我國の社會問題中殊に長き歷史を有し、且解決至難なるものは農村に於ける有產無產の兩階級の爭鬪である。それは農村にはたゞ机上の空論のみでは解決されない程傳統と舊慣とがあるからである。然るに農村問題は輓近あまりに無反省に論議せられつゝある。その結果はなはだしきは隣保共同の美を以て誇る農村が修羅の巷と化し、血なまぐさき風さへ吹き、天惠の良田は荒み、收め獲るべき黃金の實は、憐れ煩惱妄念の雜草となる。而して我等はこの問題の裏面の跳梁するものを見のがしてはならない。今著者はその體驗に依り佛敎の立場より敢然として公正なる批判を試む。而して言々句々みな信仰の迸りである。

發行所　京都市外深草町一ノ坪十四　振替大阪三一八〇二番　聲社

326
450

調龍叡

個人說教雜誌

一月一講

一ケ年十二册
定價壹圓貳拾錢
（郵税共）

著者と各地御同朋との月々の御悅びの雜誌であります。「說教」と「體驗と感想」と「行住坐臥」と「御同朋の聲」とはその內容であります。――さうして御淨土參りの道連が一人でも多い樣にとの念願より外には何ものもありません。

發行所　京都市外深草町一ノ坪十四
振替大阪三一八〇二番　聲社

終